ＩＳインフィニット・ストラトス『空を舞うは修羅の拳』

月影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳインフィニット・ストラトス『空を舞うは修羅の拳』

【Ｎコード】

Ｎ５３８３Ｓ

【作者名】

月影

【あらすじ】

ＩＳ、女性にしか動かせない筈の兵器。しかし、ある日それを動かした男性が見つかった事から世界は大騒ぎとなった。そしてそんな世情からＩＳの操縦者を育てる教育機関ＩＳ学園への入学を余儀なくされた、これは二人の主人公の物語

第0章ープロローグ（前書き）

読み始める前に一つ注意を。作者はこの小説を書き始めた段階では原作のラノベは持っていません。無論、原作小説は探していますし見つけたら全巻即買いのつもりですが、今はウィキの知識と原作コミックを元に書いていく予定です。原作と何らかの違いが現れるかもしれませんが其処は了承してください

第0章ープロローグ

男女平等、そんなものは既に今は昔の言葉だ……

なら今はどうなんだって？男尊女卑、いや違う……それは江戸時代の話。現代（いま）の社会は男尊女卑、男女平等と続き女尊男卑の時代に入っている。と言うのもある出来事、いやある物が開発されてからその風潮は一気に広まり、男女共にその認識が普通となった上にそれは世界的レベルにまでなっている。

各国の首脳や議員を始めとした国を取り仕切る主立ったメンバーの女性の比率も日増しに増えている。中には全員が女性と言う国もちらほらと現れている。そんな中で男性の身でありながら議員などの席に身を置いている男性は本当に優秀なのだろう、けれど議会の席とかでは意見を言えば決まって叩かれ、そしてそれに嫌気が差し自ら席を降りる。『出る杭は打たれる』正に今の時代、才能ある男性にとってこれ程ぴったりな言葉は無いだろう

実際、俺の親父もその一人だ。父は本当に優秀でそして強い男性だ。女尊男卑の風潮が広まる前、大手企業の重役としてその手腕をいかんなく発揮していた。けれど、同じだけできる人材がいれば男性より女性、そうしなければ会社の方で体面的な問題が多かれ少なかれ発生する。そんな向こう側の都合で親父は引き摺り下ろされた。

男性の中にはそんな目に遭えば、やさぐれて自棄酒に走る人もいる。けれど親父は決してそんな事にはならならず、祖父の代で道場を閉じた家に伝わる武術をお遊び程度に俺に教えてくれたり、休日は家族で出かけたりするようになった。尤も俺が成長するにつれて最初はお遊び程度だった筈の武術の修行が本格化。結局、免許皆伝処か

この流派を使い戦う者としての心得まできっちり仕込まれた時は別に使うこともないだろうし、ここまでしなくてもと思ったが……まぁ、その心得がストンと自分の心の中に納まりそしてそれを受け入れている辺り俺はやっぱり親父の息子で、血は争えないという事だろう。話は反れたが、兎に角親父はそうした家族との時間を大事にするようになり、その脇でもう一度上に行こうと必死に努力している

けれども世の中の男性全てがそんな強い人物と言うわけでは無い、その逆も然りだ。今の風潮に煽られ折れてしまう者も居る。中にはその風潮に自らも染まり女性に対し卑屈になる男性も居る

「――はあんな大人にはならないでね。どんな形でも構わない、ただ、お父さんの様にしっかりと自分の意思を貫いて、自分の足で歩いていける男性になるのよ」

これは俺がまだ１０にも満たないガキの頃、買い物に行った時に一組のカップルを見た時に俺に言った言葉だ。実際、父の姿を見て育ってきた俺にとって、女性の機嫌を伺いヘコヘコしてばかりの彼氏の姿に俺は幼いながらも余り良い感情は覚えなかったからその時は無邪気に「うん！」と頷いたんだ

そしてそれから季節はめぐり続け……俺、天乃宮真琴（あまのみやまこと）は１５歳になった

第０章ープロローグ（後書き）

はい、というわけで最初は主人公の過去に纏わる独白です。主人公設定やＩＳについては各章の間で書いていく予定です。そして次回はいよいよオリ主とＩＳの出会いについて書きます

第1章ー真琴、人生のターニングポイントを迎える

「昔の夢、か」

線路の上を軽快に走る電車に揺られ、片手に参考書を持ったまま眠ってしまったらしい。黒のショートシャギーヘアー少年、真琴は目を擦り、軽く背伸びをした後に再び参考書に目を向ける。もうすぐ中学を卒業する彼は高校の受験を受ける為に会場となっている公共の施設へと向かっていた。周りには同じ様に必死に参考書に目を通す人々。とは言えその様子も様々で最後の復習程にさらっと目を通している様な人も居れば、血眼になってブツブツと本の内容を口にしている人もいる。ふと視線を感じ、そちらに目をやると其処には「チクショォ、優等生なんて・・・爆発しろ爆発しろ爆発しろ」と呪詛、とも思える言葉を投げかけてきている男子の姿。どうやら、さっきまで眠っていた真琴の姿を見てこいつは余裕なのかと嫉妬したのだろう。というか……

（それを言うならリア充だろうに）

と口にしたかったが何か怖いのでツッコミは心の中だけにし、すぐに目を離し参考書に目を戻した。そんな真琴の姿が更に癪に障ったのか女の様に「キィィィィーーッ」などとハンカチを噛み奇声を上げる男子。だが、ここは公共の乗り物の中で更には最後の復習（一部の人は復習という名の足掻き）をしてる少年少女が多いわけで、すぐさま周りから「うるさいっ！！」との声が挙がり更には「お客様に連絡します。電車の中ではお静かにお願いします」と抑揚無く事務的な車掌さんからの放送のダブルパンチで一気に打ちひしがれる。真琴がこれ以上刺激しないように聞こえない様小さくため息を吐いた段階で電車は途中の駅で止まり、そこで受験生達が更に乗車

してくる。真琴が手に持ってた参考書を隣の席に置いてあったバックにしまって別の参考書を取り出して開こうとした時

「ちょっとよろしいかしら？」

ふと聞こえてきた不機嫌な声に真琴が本から目を上げると其処には縦ロールに金髪のいかにもお嬢様といった感じの女子が腕を組み、先の口調どおり不機嫌そうな表情をしてその碧眼で真琴を睨んでいた

「座席の上には荷物を置かないで下さらない？　はっきり言って邪魔ですわ」

確かにこの状況ならマナー違反をしている真琴に非があるのは明らか。けれども

（注意するにしても言い方があるだろうが……）

等と思うが真琴はそれを口にせず、無言でバックを棚の上に挙げるとその女子もその隣に足元に置いてあった大きなバックを置いて、真琴の隣に腰を降ろす

「全く……なんでこの私がこんなマナーもなってない男の隣なんかに座らなければならいのかしら」

等とブツブツ言ってる

だったら、他の席に行けよ。と内心うんざりし、少しムッとする。が、どうやら周りは完全に満席だったらしくこの少女も仕方なくここに座っているようだ。なら、これ以上は何も言う必要は無いかと。真琴も改めて参考書に目を戻す。尤もこれ以上も何も真琴は最初か

らなんの反論もしていないのだが。ふと、何を思ったのか隣の少女に目を向けるとそこには周りの様に参考書を出したりもせず、ただジッとしており時より左耳に、正確にはそこにつけている青のイヤーカフスに手をやっている。少しだけ気が治まったのかさっきよりは表情が険しさは薄くなっている

（余裕なのか、はたまた単なる自信家なだけか……）

実は真琴もそこそこ周りの事は気になっていた。あの少年はどれぐらい出来るのか？とか、同じ所を受けるライバルなんだろうか？とか無関心を装っているもそこは自分の選んだ生き方に殉ずるが故なのだ

彼の選んだ生き方は一言で言うなら普通。抜きん出た男は叩かれる、生まれた時からそんな社会で生きてきて、父も含めそうした男性をテレビとかで見てきた真琴は平凡で騒がれる事も無い、所謂普通で平凡な人生を歩もうと決めた。けれども

（それでも自分の意思はしっかり持て。そうだろう？　お袋）

目を伏せながらフッと笑みを浮かべ家に居るお袋に心の中で語りかける真琴。高望みはせず、必要ならば目の前の現状や立場は受け入れ妥協はする。けれどもせめてその範囲の中では最善尽くし、自分を貫き通す。そんな前向きと後ろ向きがごっちゃになり、何処か矛盾した生き方こそ、真琴の望んだ生き方だった

それから、幾つかの駅を超えて漸く目的の駅に到着した所で真琴は電車を降り目的の施設へと向かいそのまま試験の会場に向かうも

「ここは何処？　私は誰？」

見事に道に迷い、軽くボケてみるもそれに対するツッコミは勿論無く、真琴はさっきの発言を自分の中でなかった事にして再び歩き始める。腕時計を見るも集合時間まであまり時間は無い。その為、他の受験生は殆どそれぞれの会場に入ったのか人の影も殆ど無い……

（しゃーない適当に入るか。外れたら外れたで、多少の恥は覚悟で誰かに聞くとするか）

そう考え、真琴は当てずっぽうで手近な部屋へと入っていった。その扉が真琴の人生を真琴の望む形とは１８０度違う方向に導くものとも知らず……

「あの、すいませ……」

「ああ、もしかして受験生か？」

部屋に入ると其処には誰かと話しながらパソコンのキーボードを叩く職員と思われる女性の姿。肩で受話器を挟んでその手はキーボードを叩きながら「はい・・今は、試験会場の方で一応試験を受けてもらっています」とか「彼の名前ですか？スイマセンまだ確認してないんです」とか電話で誰かと話している。その雰囲気は切羽詰った、と言うよりはとんでも無いものを見つけあせっているようにも見えた。やがて職員が背中越しに誰かの気配を感じると真琴に対し

声を掛ける。が、相変わらず目線はキーボードに向いたままだ

「あ、はい。そう……です」

受験生か？という問いが帰ってきた辺りここで正解だったのかなと判断し

「こっちは少し、いや、ものすごく忙しいの。さっさと着替えてきて。其処の部屋にあるから」

何に着替えろと言うのか？もしかしてカンニング対策の為、受験する際の服装まで指定されてるのだろうか。まぁ、こちらも急いでいるしさっさと着替えるかとドアを開けると其処には

「これって……？」

其処には服なんて無かった。いや、正確には何も無いわけじゃない。目の前にはまるで武者鎧を思わせる様なモノとその下に着るであろう“女性”用のインナー。

「ＩＳ……か」

インフィニット・ストラトス。かの自他ともに認める天才科学者、篠乃之束博士が作り出した宇宙空間での活動を想定されたマルチフォームスーツだったが、過去に起きたある世界的な事件がきっかけとなり宇宙進出ではなくパワードスーツとして軍事利用に転用された。そのスペックは従来の兵器を遥かに上回る。その為、アラスカ条約に基づき軍事利用は禁止。ＩＳは操縦者の安全確保に関する機能は特に優れており、その為今はルールに基づくＩＳ同士をのバトルや競技などスポーツとして使われている。そして……

（今のこの社会を生み出した一番の原因……）

そう、このＩＳこそ女尊男卑の風潮を生み出した。ＩＳの最大の特徴、それは女性にしか動かせないという事。先も言ったとおりＩＳは今や世界的に注目を浴びている。その為、それを動かす事が出来る女性の方が優れている、それが発展し女性の方が偉いという思想が広まり今の社会を生み出している

何だってＩＳがこんな所においてあるのかは判らない。いや、多分ＩＳに関する何らかの試験。そこまで考え真琴はある結論を出す

（ああ、そうか。ＩＳ学園の試験会場もここだったのか）

ＩＳ学園とはＩＳを動かせる少女を集めＩＳの操縦技術を学ぶ学校だ。よくよく思えばここはあくまで公共施設。真琴が受験する藍越学園の関連施設じゃない。なら他の学園の試験がここで行われていても別に不思議じゃない。受験者違いか……苦笑を浮かべながら真琴はＩＳに近づき

「あんたが作られたお陰で俺の親父は大変だったんだぜ……」

うちの親父が理不尽な人事を受けたのは今の社会が原因、だが、その社会を生み出したのはＩＳだ。つまりＩＳが全ての原因とも言える。特に恨みがあると言う訳じゃないが思うところが無い訳でもない。冗談のつもりでそんな事を言ってみるも目の前のＩＳはウンともスンとも言わないし、勿論言う筈もない。真琴は苦笑を浮かべたまま最後にＩＳを軽く蹴ってみた。いや、蹴るというよりはただ単に軽くつま先をぶつけた程度だ

（さっきの人に会場の場所を聞くか……）

そう考え、その場を後にすべく踵を返した。しかし――

「っ！？」

直後、ヴンッという機械音が聞こえ真琴がＩＳに目を戻すと其処には様々なディスプレイが真琴とＩＳを囲む形で映し出されていた。其処からは無意識と目の前で起こっている出来事に対する僅かばかりの好奇心からの行動か真琴はＩＳに手を伸ばす、『皮膜装甲展開（スキンバリアー）』とか、『推進機正常作動（スラスター）』等など機械音声が響き、気がつけば

「どうなってんだよ……これ？」

左手に一本のブレードを持ち、ＩＳを装着している真琴の姿があった

「ちょっと何時まで掛かってるの！？　こっちは今いそがし……い……っ！？」

その直後、さっきの職員が何時までも来ない受験者に業を煮やしてやってきたが、その表情は次第に驚愕に染まった。そりゃそうだ。目の前にＩＳを動かした“男性”が居るのだから

「あ、あなた……そ、それ……」

「あの、その、えっと……」

正直、真琴はめっちゃ困惑していた。この状況をどう説明すればいいのか？しばし考えた結果。真琴は震える手で自分を指差してる職員に対し

「何か……このＩＳ誤作動を起こしたんですけど」

等と言ってみるも本来なら男性には反応すらしないＩＳがどう誤作動を起こせと言うのか。そんな言い訳など無論、通じる筈も無かった

第1章ー真琴、人生のターニングポイントを迎える（後書き）

と言うわけで真琴とＩＳの出会いとなります。一夏の時と似たようなケースですが、それに関しては触れないで置いてくれるとありがたいです。

第2章ーそして物語は胎動する（前書き）

第一部のエピローグです。漫画コミック第０話がベースです

第2章ーそして物語は胎動する

「ふぅ……」

真琴は自室のベットに仰向けに横になりながら、手に持った書類を目の前にかざす。その書類はＩＳ学園への入学手続きの書類。必要事項も記入し印鑑も押した後はこれをポストに投函すれば向こう３年の進路が決定する。あの後、これを渡されてしまった以上はＩＳの件を親には内緒にする訳にもいかず家に帰った後、直に正直に白状した。結果は勿論大騒ぎ、ちなみに両親のそれぞれの反応は

「お、落ち着くんだ母さん。こういう時は、そう素数を数えればいい。１、３、５、８、１０、１２……」

「途中から偶数になってるぞ親父……」

「そ、そうね……えーっと、こういう時は赤飯を炊けばいいのよね？」

「お袋、それは祭りや祝い事の時の話だって」

それから数日、最初の頃は記者やリポーター、他にもどこぞ科学者や政府の人間が止め処なく押し寄せてきていたが、それも漸く落ち着いた。真琴はベットに横になったままテレビのスイッチを入れる。其処には丁度ニュース番組がやっていて

「それでは今日は話題の織斑一夏君と天乃宮真琴君についてです」

アナウンサーが最初の話題を説明するとその後ろに自分ともう一

人のＩＳを動かした男の子、織斑一夏の画像が映し出され

『私はよく判らないんだけどねぇ。やっぱり大変な事なの？これって』

ＩＳなんて今や世界的に有名なのに判らない訳無いだろ。と、明らかに話を広げる為のコメントから話を始め、アナウンサーがコメンテーターに話を振るとコメンテーターがＩＳの事を話し始めた。

（しかし、まさかもう一人が一夏だったとはな）

そう、ＩＳを動かしたもう一人は自分の中学からの親友だった

（あいつが居るなら何とかやってけるかもな）

テレビに映る、親友に対し笑みを浮かべつつそんなことを思っていた

「一夏……！なんで一夏がテレビに出てんの！？」

所変って某所。其処に住んでいた少女は風呂上りにテレビを点けて適当にチャンネルを弄っていると其処に６年前に分かれた幼馴染の姿を見つけテレビに釘付けになった。が、直後に話は一夏達の事からＩＳへと変ってしまう。すると、少女はいきなりテレビを掴んでガタガタと揺らし始め

「ＩＳはいい、一夏を映せっ！！」

と、小さな子供の様にテレビに向かって文句を言い始める。それだけ離れ離れになった彼の事が気になった。しかも、その話題がＩＳを動かしたと世界的な事件と来た。一夏はこの先どうなるのかそれが気になって仕方が無い。可能ならすぐにでもあいつの所に飛んでってことの次第を問い詰めたいぐらいだった

「政府としては二人をあそこに行かせるでしょうねぇ。ＩＳ学園に」

「えっ……」

が、次のコメンテーターの一言を聞いてピタリと止まり

「一夏も……？」

そう呟き、クローゼット内にかけられた今度から着る事になる制服に目を向けた。それは今さっき名前が挙がった自分がこれから通う学校の服だ、

（一夏に……会える？）

そう考えると頬が自然と熱くなり、気分を落ち着かせるべくテーブルに置いてあったお茶を一気に煽った

それとは別の場所でもう一人の少女。試験の時、真琴の隣に座っていた少女は不機嫌そうにその手に持った巨大なレーザーライフルの銃口を訓練用のターゲットに向ける

（まさか、こんな事態になるなんて……）

マナーもなってないあの少年。この私が直々にその事で注意してさしあげたというのに私の事など気にも留めず無言。その後も周りの事に対してもまるで関心が無いとでも言うような無関心な態度、はっきり言ってかなり癪に障った。“あの人”と毛色こそ違うが自分にとっては嫌いな部類に入る人間で出来る事ならさっさと離れたかった。けれども、どうせ目的地に着くまでの間だけだ。この男と自分は立ってる世界が違う、電車を降りればもう二度と会う事も無いだろうと、そう考えていたと言うのに

「お嬢様」

直後、自分を呼ぶ声が聞こえるとそこには自分の専属にして幼馴染のメイドが手に持った銀の盆の上に缶のスポーツドリンクを乗せて立っていた

「話題の少年が同級生になりそうですね」

そう、もう会う事もないと考えていたと言うのにどういう経緯か彼はＩＳを動かした。レベルも実力も自分の方が断然上だがそれでも同じ世界に上がってきた事には変わりない。それが気に入らなかった

「興味ありませんわ。私がＩＳ学園に行くのはサーカスを見る為で

はありません。彼らがどこで何をしようと構いませんが」

だが、そればかりを気にしても居られない。自分にはやるべき事がある。その為に寄り道なんてしてられない。けれど……

「もし私の邪魔をするなら……」

少女は飲んでいたスポーツドリンクの缶を突然、宙に放り投げるとそれに銃口を向けてトリガーを引く。発射されたレーザーが正確に缶を打ち抜き、残っていた中身が飛び散る

「潰してやりますわ」

「だ、か、らっ！！　何でアタシがＩＳ学園に入れないのよ！？」

「そんな事言っても君が受験しなかったからでしょ？　凰君（ファン）。受けるよう言ったのに無視したのは君だよ」

男性は困っていた。困っている原因目の前に居るツインテールの少女の事。彼女はＩＳ操縦者、だからこそより経験を積ませる為、最初は学園への入学を薦めたと言うのに「必要ないから」の一言で断った。と言うのに今日いきなり態度を一変させて入学させろと言

ってきた

「そんな昔の事はどうでもいいのっ！　何とかアタシが入れるようにしないさよっ！！」

「軍にも予定があるしねぇ……」

昔と言ってもほんの1，2週間前の話だ、軍や自分のスケジュールも既に彼女が入学しない方向で固めた。今更そんな事を言われても無理がある。肩をすくめながら隣に居た補佐官に声を掛ける。が、その直後ドガァっ！と言う音と共に自分の頭のすぐ横の壁に装甲に覆われた拳がめり込んでおり、破片がパラパラと落ちる

「お願いします。おじさま」

そして目の前には表情こそ笑顔だが頭には青筋を浮かべ拳突き出した少女の姿。言葉の言い方こそ丁寧で可愛いが、その裏に「あんたのスケジュールなんてどうでもいいからなんとかしなさいっ！でないと……次は当てるわよ？」と言う裏の声が聞こえてきそうだ。男性も冷や汗をダラダラと流し始め

「わ、判った。出来るだけ早い時期に転入手続きを済ませておこう……」

「いつもありがと、話が判るわね。んじゃよろしく～」

男性が了承の意を伝えるとコロッと態度を変化させ、そのまま部屋へと戻っていく少女。男性からしてみればあんたが脅してるんじゃないかと言いたいが言えばどんな目に遭うかわかったもんじゃない

（はぁ、失敗したな～。こんな事ならあの時素直に受験を受けておくべきだったな）

自室への通路を軽快に走りながら少女は思う、最初はＩＳ学園なんてどうでもよかった。けれどもそれから暫くしたある日、ニュースに映っていたのは自分の幼馴染。しかもその幼馴染はＩＳを動かして、自分が入学を拒否った学園に来るんじゃないかと騒がれている。最早居ても立っても居られない、彼に会えるなら是が非でもＩＳ学園に行かなければ。そう考え、あのおっさんとオハナシをして快く許可ももらった。さぁ、これから忙しくなる。やる事はさっさと済ませて自分も準備を進めなくては

（待ってないさいよ……一夏っ！）

（他に考えるべきこと無いのかよ……）

少年は今も自分の事を好き勝手に話しているニュースにうんざりし、テレビの電源を切った。

（さて、どうするかねぇ……）

今の一番の悩み……それはニュースでも言っていたＩＳ学園への入学。自分はただ受験会場を探して迷い、たまたま入った部屋でＩＳを見つけ、偶然ふれたらそれが動いた、と言うだけなのに。いや、

そもそもその偶然自体世の中の常識的にありえないからこそこうして騒がれているのか。ぼんやりと今後の事を考えている少年、一夏の顔に何かが乗っかった。それはビニールの中に入っていた一着の服

「なんだこれ……？」

「制服だ」

一夏の呟きに答える様に聞こえた女性の声。そちらに目を向けるとそこにはビジネススーツに身を包み、冷蔵庫からビールを取り出している自分の姉の姿

「千冬姉、帰ってたのか」

「ここは私の家だ。そりゃ帰ってくる」

「ところで、制服って」

「ＩＳ学園のに決まってるだろ」

この姉は今なんと言った？ＩＳ学園の制服だと？

「なんで！？　俺まだ行くなんて「入学手続きも済ませておいた」

弟の言葉を遮るようにすらすらと用件だけを伝え、缶ビールのふたを開けそれを煽る千冬。そして一度缶から口を離すと

「あそこは何処の国も手出しできん。入学少なくても3年間は安全だ。それとも実験動物の方がよかったか？」

千冬は入学を躊躇っていたもう一人の少年にも言った事を自分の弟にもぶつけた。その少年、真琴もこれで折れた。そして案の定この弟も

「はぁ～、どうしてこうなっちゃったのかなぁ……」

それは諦めと言う名の肯定の言葉。実際、ＩＳを使える男子として実験やさらし者になるのはゴメンだった。ニュースでも俺達の生態データがどうとか言ってたし姉の言ってる事は間違ってないのだろう

「そう気を落とすなＩＳ学園も普通の高校と大差ない。どこで過ごそうと日々を充実させるのはおまえ自身だ。求めよさすれば与えられん……そう言う事だ」

つまりは何処で何をしようとそれは全て自分次第、ならば嘆くよりまず先に動け。何とも姉らしい言葉と思いつつ一夏は苦笑を浮かべ。申し込み用紙に同封されていたパンフレットを開いた

「ＩＳ学園……かぁ」

様々な思惑、意思、目的を持って役者は集まる。そこで彼らはどんな物語を紡ぐのか、物語の舞台はいよいよＩＳ学園へとその場所を移す

第2章ーそして物語は胎動する（後書き）

漸く次から学園編で真琴のＩＳも登場します。オリキャラ紹介とＩＳの紹介はそれに合わせて行います

オリキャラ紹介（前書き）

オリジナルＩＳは登場後に紹介します

オリキャラ紹介

名前：天乃宮真琴＜あまのみやまこと＞
性別：男性
特技：格闘術
容姿：黒のショートシャギーヘアーに黒い目と一般的な日本人の容姿
身長：１６６センチ
体重：６１キロ

一夏とは中学からの親友で、なんの因果か一夏共々ＩＳを動かした男として世界的に騒がれている少年。実際はとても明く、父親譲りのどんな事にも屈しない強い精神の持ち主だが、女尊男卑の風潮の中で生きて来て、尚且つ父がそれの煽りを受けた事から自分の本音とかを押さえ込み、周りの人間との衝突・・特に女性との衝突を避ける様になった。それはかつての母に言われた。女性の機嫌を伺いながら生きる様な情け無い男にはならないでと言う母の言葉を自分なりに実行し、女性にヘコヘコとするぐらいなら余り関わりあいになるまいと少し矛盾した生き方をしようとしている為である。家に代々伝わる武術『覇神拳』の免許皆伝者であり、入学試験の時も訓練用のＩＳ、打金に搭載されたブレードを使わず、拳のみで戦った

第3章ー男女比率二人：残り全員の学校（前書き）

ここからいよいよ本格的な学園編に入ります。他のヒロイン達も登場してきますよ

第3章ー男女比率二人：残り全員の学校

（予想以上に・・これはきつい。きつ過ぎるっ！！）

真琴は今、そんな事を考えながら周りを見ない様にひたすら窓の外に目を向けている。前の方の列だが窓際の席なのは助かった。もし、真ん中やドア側なら嫌でも周りの状況に目が行く。周りが女だらけというこの状況。四方八方、東西南北、３６０度何処を見ても女女女。ハッキリ言ってこの状況で何ともないと思える男は鋼の精神を持つ奴か究極の女好きのどちらかだけだ。直後、教室のドアが開くと女子の視線の一部がそちらに集中する。その少年、織斑一夏は暫く教室内を見渡し、真琴の姿を捉えるとホッとしたように彼の傍に行くと隣の席に座り

「よっ、どうやら同じクラスなんだな」

「みたいだな・・・と言うか、そうじゃなかったら泣くぞ俺は。それこそ誰か助けてくださいっ！ってみたいに」

「何処の某恋愛ドラマだ・・・それ」

今まで孤立無援な状態だった真琴にとって一夏と同じクラスと言うのは心底ありがたかった。真琴が軽いボケを交えて一夏と話すと一夏もきっちりツッコミを入れて返してくる

「と、まぁ何だかんだでまた同じ学校に通う訳だし・・・」

「ああ、そうだな。またよろしく頼む」

「こっちこそ、な」

そう言って拳と拳を打ち合わせる一夏と真琴。直後、一部の女子の間で真琴が受けだとか攻めだとか変な会話が聞こえたが二人揃って聞かなかった事にした・・・

「ところで、真琴」

「ん？どした」

少し、気が楽になったのか、さっきよりは明るい口調で言葉を返す。が、次の一夏の言葉は真琴を完全にフリーズさせる

「恐らく今日のＳＨＲで自己紹介があると思うが、ちゃんと考えてあるのか？恐らく一番最初だぞお前」

ピシッ！今の状態を擬音で表すなら正にこれだ。今、一夏はなんて言った？ジコショウカイ？そんなものは周りと同じ事を言って当たり障り無く済ませるつもりだった

「俺、一番最初なのか・・？」

「と言うか“あ”から始まってんだから、ほぼ一番最初だろ」

（誰か・・・・助けてくださいっ！！！）

心の中で本気でそんな事を叫びながら真琴は今まで一番頭をフル回転させていた。一夏の言うとおりＳＨＲの自己紹介は案の定真琴が一番手を勤め、更にはＩＳ学園の数少ない（と言うか２人しかしない）男子と言う事もあり、女子達の興味と期待の目線が容赦なく真琴を襲う

「天乃宮真琴です・・・」

とは言え、何時までも無言でいるわけにも行かないので、とりあえず名前だけを言ってみた。が、無論それだけじゃ女子の興味は消えるわけも無く「他には？」とか「それだけ？」と言った目線が真琴に突き刺さる

（一夏っ！マジで助けてくれ～～）

と、自分の唯一の味方である一夏にアイコンタクトで助けも求めるも

（貴公の奮闘に期待するっ！）

と、速攻で一蹴。さすがの真琴もこれにはカチンと来た。来たからこそ

「えっと、卒業まで平穏無事に過ごせればいいと思っているので皆さん、よろしくお願いします」

と言って軽く一礼。そしてその後

「まぁ、これ以上何か話したら我が親友、一夏の話す内容が無くなるのでここまでにします」

（な、なにぃぃぃぃ〜〜っ！？）

せめてもの報いとして気の利いたコメントに関しては一夏に丸投げしたのだった・・・

「えっと・・織斑一夏です。よろしくお願いします」

それから少しして、まわって来た一夏の自己紹介。もう一人の興味の対象、そしてさっきの真琴のコメントが普通すぎた事、そして真琴のパス（と言う名の丸投げ）の相乗効果で女子の興味の視線はより一層強くなる。今度は一夏が真琴に目線を送ると。真琴はその視線を受け流し窓に目をやった

（ためらいも無くスルーされたっ！？）

が、一夏にはそんな事を驚いているヒマも無く、女子からの視線が一夏に注がれる。何か言わなければ、けれど何を言えばいいか判らない。かと、言ってこのまま無言でいて暗い奴のレッテルを貼られるも嫌だ。目を泳がせながら色々考え、やがて一夏は結論を出し、目線を戻す。女子達も何を言うのか期待して一夏に視線を送る。

「以上ですっ！」

故に次の一言でクラス全員がずっこけるのは当然の流れだろう。一夏の結論、それは元気良く話を切る事だった。直後、スパンッ！乾いた打撃音が響き、首が下がる。そこには鋭い目付きにスーツを着

た女性の姿、その手にはさっき一夏を叩いたとされる出席簿が握られていた

「げぇっ！？関羽・・・、あだっ！」

「あ、千冬ｓ・・・・うごっ！？」

直後、今度は出席簿の角の一撃が決まり、一夏は頭を抑えうずくまり、真琴も机の上に崩れ落ちる

「誰が三国志の英雄だ。それと、ここでは織斑先生と呼べ」

織斑千冬、すでお判りの通り、一夏の姉にして世界最強のＩＳ操縦者“だった”人物。と言うのも、ある時を境に突然の引退。以後、ＩＳの世界から姿を消した人物だ

「あ、織斑先生、職員会議の方は終わったんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

すると、千冬は生徒達の方に向き直り

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育て上げるのが仕事だ。出来ないものには出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の言う事は聞け。いいな？」

なんと言う鬼教官振り、特に最後の件（くだり）、これはすなわち逆らった場合は意地でも言う事聞かせるぞ、との同義だ

（千冬さん、ここの先生だったのか・・・って、あれ？）

頭をさすりながら頭を起こした真琴が異変に気づく。今まで自分と一夏に向けられていた視線がなくなっている。そしてその直後

「「「キャーーーーーーーーッ！！」」」

（（ウルセェーーーーッ！！））

直後、挙がる女子達の黄色い声。そして突然の声に耳を押さえる男2人

「本物よっ！本物の千冬様よーーっ！！」

「美しすぎますっ！！」

「お姉さまにあこがれてこの学園に入ったんですっ！！」

「愛していますっ！！」

等など千冬のファン（と言うよりほぼ全員）から挙がる歓声。千冬はその様子にため息を吐き

「全く、毎年よくこれだけのバカどもが集まるものだな、感心させられる。それとも、私のクラスに集中させているのか？」

あなたが世界的に有名だからです。等と真琴にはツッコム気になれない。それに何より

（ま、まだ耳がキーンと・・・）

どうやら、それどころではないらしい・・・

「まぁいい。ところで満足に自己紹介もできんのかお前は？」

「いや、千冬姉、俺は」

「織斑先生と呼べ」

もう自己紹介は終わってる。と言おうとした直後に再度、出席簿の一撃ちなみに今度は背表紙での一撃だ。角よりはマシだが、細い分やっぱり痛そうだ

「えっ？織斑君って・・？」

「ひょっとして千冬様の？」

「そういえば、苗字も一緒だし」

「いいなぁ・・代わってほしい！」

「それじゃ、ＩＳを動かせるのって・・・」

今のやり取りで一夏と千冬の関係を察した生徒がひそひそと話し始めるも千冬は意にも介さず「静かにしろ！」と生徒達を一言で黙らせ。出席簿を教壇の机に勢い良く置いて

「さぁ、ＳＨＲは終わりだっ！これから諸君にはＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後は実習だが基本動作は半月で体に染込ませろ。いいか？いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

訂正、鬼教官どころかじゃない。最早暴君が先生をしてると言っても過言ではない。が、そんな言葉や態度すらミーハーな女子生徒にはかっこよく見えたのか相変わらず、尊敬の眼差しが千冬に集まっていた

第４章－二つの再会、矛盾の綻び

ＩＳ学園はＩＳ操縦者のエキスパートを育てるための学園、その為半日で終わるほかの高校と違い、初日からフルスロットルで授業を進める。そんな最初の授業はＩＳについて。と言ってもＩＳの動作を座学で説明する訳でなくそもそもＩＳとは何なのか。ＩＳに纏わる基礎的な歴史についての授業になる。そしてその中にこのＩＳ学園設立の経緯も説明された。まぁ、簡単に言えば

「てめー日本人の作ったＩＳの所為で世界中が混乱してんだから責任持って人材管理と育成の為の学園を作って技術は寄越せやコラ。あっ、でも運営資金はそちら持ちな」

あんた何処のヤクザだ、と言う様な言葉で説明するとこんな感じだ。で、ＩＳは女性にのみ動かせるから実質ＩＳ学園は女学院状態となっている訳だ。と、まぁ授業の風景なんぞこれっと言った事は無いのでこのぐらいにして一限目の休み時間

「なぁ、真琴・・・」

「どうした、一夏？」

「人間って極度に緊張するとホントに気絶しそうになるんだな。てっきり、漫画やアニメとかの話だけだと思ってた・・・・」

「寝るなぁ寝たら死ぬぞ、主に俺がっ！」

「お前がかよっ？！」

確かに、ラブコメとかでヒロインが好きな人と物理的に急接近したりすると恥ずかしさと緊張で気絶するシーンがよくあるが、一夏はそれは過剰な表現ではなくホントの事だと確信していた。と言うのも、休み時間になった瞬間、二人の姿を一目見ようと他のクラス、更には他の学年からも女子が押しかけてきた。二割増しとかそんなレベルじゃない。最早倍増と言っても良いほどに女子からの興味の視線が注がれていた。そんな時

「一夏、話がある」

状況を打ち破るかの様に二人に話しかけた一人の少女、千冬程では無いが鋭い瞳にポニーテールの少女が腕を組んだ状態で座っている二人を見下ろしていた

「どちらｓ「箒？」えっ、知り合い？」

普通、自己紹介をしっかり聞いていれば誰かぐらいは判るだろうと思うが、実は一夏の自己紹介と千冬と一夏のやり取り、熱狂する女子を宥める等など色んな事で時間を取られ自己紹介は一夏の順で終わっている。普通、そこは少し時間を延ばしてでも行う所だが冒頭の理由と千冬の鬼教官スキルによって次回のＨＲに持ち越しとなってしまった訳だ。閑話休題

「何だ、話って？」

「いいから、こい。真琴、だったな？少しこいつを借りるぞ」

「えっ？」

「悪い、真琴すぐに戻るから待っててくれ」

「はっ？」

トントン拍子で話を進めるとそのまま教室を後にする一夏と箒

「ちょっと待ってくr「少し、よろしいかしら？」」

流石にこの状況で一人になるのは非常にきつい。咄嗟に自分も着いて行こうとした所でまたしても言葉を遮られた。そして声の主の方を振り返り、真琴は心の中で今日最大のため息をつく事になる

「ふぅ・・・」

教室から少し離れた場所で一夏と箒は並んで壁に背を預ける。あの視線の雨から逃れられた事で一息つけたと感じでため息を吐く。まぁ、あの場に一人残してきた真琴に関しては少し申し訳ないと言う気もしたが。とりあえず今はこっち（箒）の方。あれから箒は何も放さず一夏の方をジッと見つめ（というより睨んでいる）。仕方が無いので一夏の方から会話を切り出すことにした

「久しぶりだな、箒」

「えっ？」

「直ぐに箒だって判ったぞ。６年前を髪型も一緒だしな」

「・・・よく覚えているものだな」

最後に会ったのが６年前、小学生の頃だ。あれから６年も経ち自分も一夏も変わった。この髪型だって特に珍しいものじゃないし、最悪自分だとわからないかもしれないと覚悟はしていたがこの幼馴染は一発で自分だと判ってくれた。それが何処か恥ずかしく、そして嬉しかったから箒はさっきまでの睨んでいるような目付きから一変、恥ずかしそうに一夏から目を逸らし自分の髪に手をやった

それと同時刻、真琴もまた知人・・いや、こちらの場合は通りすがりに顔を合わせた程度の人物との再会をしていた。尤もそれは真琴にとっては余り喜ばれたものでは無いが

「まぁ、何ですの？その態度、折角この私が話しかけていると言うのに、それ相応の態度と言うものがあるのではないのかしら？」

「・・・そりゃ失礼しました。初対面って訳じゃないけどあんたが誰なのか判らないもんで」

声の主は他でも無いあの時（プロローグ）に真琴が出会った少女だ。何となくだが、真琴はこの少女も学園に居る事は予想できてた。ＩＳ学園の試験は筆記よりも実際にＩＳを動かし教官と手合わせをする実技に重きを置いている。その為、他の学園の様に筆記に躍起に

なる必要がなかったからだ

「私を知らないっ！？イギリス代表候補生であるこの私、セシリア・オルコットをっ！？」

自分の祖国では知らない人など居ないし、ＩＳの世界においても自分の名は知れ渡っている。だと言うのに目の前のこの男は自分の事を全く知らないというのか？信じられない！セシリアはそんな感情をぶつける様に真琴の机を叩きながら声を荒げる

「とりあえず・・話の腰を折って悪いが、一つ質問いいか？」

「まぁ、下々の者の要求に答えるのも貴族の務めですしよろしいですわよ。何でも聞いてみなさいな」

（やれやれ、覚悟はしていたがやっぱり鉢合わせたか。この手の手合いと・・）

今のこの社会の風潮、それに染まるのは何も男性だけでない、むしろ女性の方が多い。女である自分の方が偉い。そういう考えを持つ者は多く、しかもそれがまかり通ってしまう。そしてそこに上流階級の貴族と言うのも加わると尚タチが悪い

「じゃあ、遠慮なく。代表候補生って何だ？」

次の瞬間、再度クラスの全員がずっこける。セシリアもありえないもの見るかの様な表情になりやがて、表情を険しくすると

「代表候補生と言うのはその名の通り、国家の代表として国に選ばれるＩＳ操縦者の候補生の事ですわっ！それぐらい名前で察しなさ

い。全く・・これだから知性の欠片も無い男は・・・」

電車の時もそうだが、ホントにイラっとくる。ホントは何か言い返してやりたいが、触らぬ神に祟り無し。何も言わず、ただボーっとセシリアを眺めていると

「判りましたか？私は言わばエリートなのです。本来なら私の様な人間と同じクラスになれただけでも幸運なのよ。だと言うのにさっきからなんですの、その淡々とした態度はっ！？」

「同じクラスになれるなんて光栄でございます～、とでも言えばいいのか？」

「あなた・・バカにしていますの？」

しまった・・・。余りにセシリアが突っかかってくるから、今までずっとガマンと妥協をして生きてきたからつい口が開いてしまった。そう思った頃には既に遅く、セシリアはさっきまでと違い、冷たい目線で自分を見下ろしている。どうしたもんかと・・・真琴が悩み始めたが直後に予鈴が響く

「話の続きはまた改めて・・よろしいですわね！？」

真琴に指を突きつけて、そのまま席に戻っていくセシリア。助かった・・と思うと同時に、まだ突っかかってくるのかと来年はせめて彼女と別のクラスになれる様にと願いながら次の授業の準備を始めた

セシリアとの出会い。それは媚びへつらいはしない、けれども無駄に刺激するような事もしない。情けない生き方はしたくないと願う、けれども周りから見ればその願いからは矛盾し、成り立たない生き

方に少年でも気づかない小さな綻びが入った瞬間でもあった

第４章ー二つの再会、矛盾の綻び（後書き）

とりあえず、地元の本屋さん全部周っても原作小説が見つかりません・・・。週末には少し遠出するのでそこにかけます。そして見つかり次第、新しい話を書きつつ、今までの話も編集、修正していく予定です

第5章ー宣戦布告！クラス代表選抜戦開催決定

「お～、イッテ～～～・・・まだズキズキ言ってやがる」

「いや、幾らなんでも、捨てましたは無いだろう・・」

3時限目の休み時間。未だに痛む頭を抑えながら愚痴る一夏にせめてもの足掻きと次の授業の参考書に目を通しながら真琴が呆れながら答えた。というのも

「では、ここまでで質問がある人」

ＩＳの歴史的や概念に関わる授業が終わり、次の時限はいよいよＩＳの本格的な構造に関する授業。一夏と真琴も先生の話や説明、黒板に書かれたと言えば語弊がある黒板の前に表示されたディスプレイの内容をノートに書き取っている。その姿だけを見れば普通に授業に着いて行ってる様に見えるが

（（全然、判らない・・・・・））

バススロットだのイコライザだのはっきり言って単語以外全くと言っていいほど理解不能だ。電話帳だと思われる教科書の中身も二人からすればどこかの呪文の様に見えてくる

「織斑君、天乃宮くん、どうかな？」

「えっ？」

「どう、とは？」

直後、山田先生から声を掛けられ二人は顔を上げる

「質問があったら聞いてくださいね。先生なんでも答えますから」

どうやら、突然ＩＳの世界にやって来た二人を気遣って尋ねてきたようだ。少し、抜けている所もあるがどんな生徒にも変わらず接してくれる辺り先生としては立派だ

「先生」

「はい、織斑君！」

やがて、一夏が意を決して挙手をすると山田先生は一夏を指差す。何処か嬉しそうなのは何故か判らないが・・・

「殆ど全部判りません」

「えっ？ぜ、全部ですか・・・」

流石に全部と言うのは予想外だったらしく、山田先生も困惑し始め

「えっと・・今の段階で判らない人は？」

そう言って教室を見渡すも手を上げたのは真琴のみ。それもそうだ、他の女子の場合はＩＳの世界に入るとと決めた段階である程度は予習したり予備知識を集めたりしている。初日の基礎的な部分で判らない人などいないだろう

「織斑、天乃宮入学前に渡した参考書は読んだのか？」

すると、今まで脇にいた千冬が二人の前にやってきて尋ねる。心なしか少し冷たい口調になっている・・

「えっと、一応開きましたけど・・どこぞの古文書みたいに見えて挫折を・・・いてっ！」

「織斑は？」

真琴の答えに千冬が容赦なく自分の武器（出席簿）を振り下しながら今度は一夏に尋ねた。が、その後の一言は真琴にとっても衝撃的で

「古い電話帳だと思って捨てました・・・」

ズガンッ！流石にこの音は出席簿では出せない。なら、何の音か。横を見ればそこには頭から煙を出して完全に気絶してる一夏の姿と出席簿ではなく拳を振り下ろした千冬の姿。どうやら、一夏には出席簿ではなく、鉄拳制裁を下したようだ

「後で再発行してやるから1週間で覚えろ、いいな？」

あの量を一週間で解読（覚えて理解）しろと？そりゃ無茶です先生。と言いたかったが言えばどんな目に会うか判ら無いのでやめた。代わりに

「あの、一夏は聞いてないです。と言うか気を失ってます・・・」

「誰か冷水をぶっ掛けてこいつを起こせ」

あなたは何処の拷問官ですか・・・・

とまぁ、そんな事もあり真琴の方は痛みは引いたが一夏に関しては
まだまだ痛みが続いている訳だ

「しかしどうしたものか・・・これだけの量を一週間で覚えろって、
恐らくどの芸人でも真っ青な無茶振りだぞ」

「と言って千冬姉相手じゃ俺ら拒否権は無いし・・・」

「かと言って一週間で覚えなかったら恐らく今度は二人仲良く鉄拳
制裁だし・・」

「「ハァ・・」」

八方塞がりな状態・・・やがて二人が出した結論は

「で、私の所に来た訳か・・」

「「はい・・」」

午前の授業が終わった昼休み。二人は一夏の幼馴染でこの学園今の所唯一腹割って話せる相手篠ノ之箒の所に来て、一緒に昼食を取りながら箒との交渉に臨んでいた

「そんなもの、参考書を読まなかったお前達の自業自得だろうが・・・」

「失敬な。俺は読んだぞ・・直ぐに断念したが」

「それは読んでないのと殆どかわらないだろう・・」

味噌汁を飲みながら胸を張って真琴が反論するも箒はハァとため息をつきながら言葉を返す

「そこを何とか頼むっ！それが終わったら週末に買い物でも何でも付き合うから」

と、一夏が箒の前で合掌しながらそういった瞬間、箒がピクリと反応し

「何でも・・か？」

食いついて来た。よし、ならば俺も後押しとばかりに真琴も口を開こうとすると。心なしか箒の顔が少し赤い事に気づいた

（あれ？もしかしてこれって）

そこで真琴がある予想を立てて一旦黙り、話の成り行きを見守る事

にした

「ああ、何でも。俺と真琴で荷物持ちでも何でもするからっ！」

「むぅ・・三人で、か」

（やっぱしっ！）

次の一夏の言葉で少し食いつきが悪くなった箒を見て真琴の予想は確信に変わった

「一夏、後の交渉は俺がやっとくから一夏は少し待っててくれ。箒、だったよな。ちょっとこっちに」

そう言って箒の手を引いて一夏から距離を置く。その途中でも箒が一夏の方をチラチラと見ていたのを見て真琴は交渉の成功を確信した

「それで、一体何の話だ・・？」

いきなり手を引かれ、箒は不機嫌に真琴を睨みつける。が、真琴はそれを意に介した様子も無く

「さっきの話だけど、俺の方は適当に用事が出来たとでも言ってドタキャンするから。それで手をうってくれないか？」

「なっ！？それって・・・」

「つまりは一夏と二人っきり・・どうだ？」

真琴が最後の部分でニヤリと笑う

「二人っ・・きり」

真琴の言葉に最早はっきりと判るほど顔を赤くする箒、やがて一

「さっきの話だが・・ほ、他でも無い幼馴染の頼みだ。どうしても言うのならそれで手を打ってやる」

交渉成立。一夏の所に戻った後の箒の一言がこれだ、ちなみに顔が赤いのを見られたくないのか完全にそっぽを向いている。

「マジか！？サンキュー箒っ！」

「う、うむ。しかし、次の週末は必ず私に付き合え、いいな」

「おう、勿論だ。なっ、真琴」

「ん？ああ、判ってるよ」

と言っても俺はドタキャンするがな、と知らない内に人身御供にされた事も知らずにホッとしてる一夏に心の中でのみ付け加え、無事？に交渉は終了した。尚、その一週間後、計画通り真琴は突然のドタキャン。結局、一夏のみ丸一日箒につき合わされ、一夏の疲労は計り知れず、対照的に箒は終始楽しそうだったのは別の話

「さて、この時間は実践で使用する各種兵装についてだが、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないとな。さて、誰かやりたい者は居るか？無論推薦でも構わないぞ」

クラス対抗戦の代表、それは簡単に言えば対抗戦の出場者と言うだけだが実の所それだけじゃない。生徒会会議の出席などはっきり言ってめんどくさい仕事ももれなくオマケで着いてくる。いわばクラス長の様な役回りだ。それがわかっているから、千冬は推薦の方も許可する。恐らく自薦だけではやりたがる人は殆ど出てこないと読んでいるのだろう。主にめんどくさいと言う理由で

「はいっ！織斑君がいいと思いますっ！！」

そして、この手の事には大概珍しいケースの人間が面白意からと言う理由で推薦されるのは当然の流れで

「あっ！、だったら私は天乃宮君が言いと思うっ！！」

「おっ、俺？」

突然の指名に一夏はうろたえ、真琴の方は予想してたのか軽くため息をつく程度

「他に候補者いないのか？居ないならこの二人で投票を行い・・」

「先生、一応、対抗戦もあるしここはＩＳの経験のある人が・・」
自分はＩＳに関して殆ど初心者だ。その状態でいきなりＩＳを使った大会に出ろなんて流石に無理がある。真琴がやんわりと辞退しようとした矢先
「ちなみに他薦されたものに拒否権は無い。選ばれた以上は覚悟を決めろ」
唯我独尊を地で行くこの人によってバッサリ両断されました・・・・
「納得できませんわっ！！」
直後、反対の声は別の所からも上がった。そこには思わず立ち上がり、自分の机の上に両手を乗せて立っているセシリアの姿
「その様な選出認められませんわ。男がクラス代表だなんていい恥さらしです。一年間その様な屈辱をこのセシリア・オルコットに味わえと言うのですか！？」
あいも変わらず男を見下したような言い方。しかし、今回ばかりは真琴は心から反論する気にはならなかった。このまま、セシリアが周りの生徒を説得しクラス代表になってくれれば願ったりだ
「いいですか？クラス代表はさきほど、そこの男が言ったとおり実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！何せ私はあの入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですもの」
「入試ってあれか？ＩＳ使って試験官と戦う奴」

「それ以外に入試などありませんわ」
腰に片手を当てながらもう片方の手の甲でファサっと自分の髪を下から上へと撫でるセシリアに一夏が尋ねるとセシリアは自慢げに胸を張った姿勢で答える
「俺も倒したぞ、教官」
「なっ・・・！？」
一夏が何でも無いかのようにサラッと言ってのけると驚きの余りセシリアの、目が大きく見開かれ
「へ～、あれに勝ったんだ？すげーな、一夏」
「ん、まぁな。って、真琴は負けたのか」
「ああ、と言っても試験官曰くギリギリだったみたいだが何を持ってギリギリだったのか、未だに判らん」
一夏の場合、初めての男のＩＳ操縦者と言う事もあり当時試験官を務めた山田先生は不用意に突撃、それを一夏が避けると山田先生はそのまま壁に激突しノックアウトしたと言う結論だったが、流石に二回目ともなると多少は落ち着きを取り戻したのか、真琴のときは普通のＩＳバトルとなった。その中で真琴は開始と同時にブレードを捨てて得意の格闘戦を挑む。その中で相手の攻撃は全てシールドが防いでくれると踏んだ真琴は徹底した攻めの姿勢で望むも相手もこちらの攻撃をシールドで防いでおり、長期戦を覚悟した矢先の敗北宣言を受けたのだった

「あなた！あなたも教官を倒したというの！？」

暫く、二人の会話を唖然とした表情で聞いていたセシリアだったが、やがて一夏の方に指を突きつけて声を荒げる

「えーと、落ち着けよ、な？」

突然のセシリアの勢いに、若干引いた一夏だったがそれでもセシリアは止まる様子も無く

「これが落ち着いていられますか！ＩＳ技術の修練の為にわざわざこんな文化も後進的な島国来て、それだけでも耐え難い苦痛なのにその上、こんな極東の猿と比べられるなんてこの様な屈辱耐えられませんわ・・・」

と、拳をワナワナと震わせながら話すセシリアの言葉に一夏も頭に来て

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ？世界一まずい料理で何年覇者になってるんだよ」

正に売り言葉に買い言葉。一夏の反論にセシリアは絶句、やがて怒りで顔を真っ赤にして

「あなたっ！！私の祖国を侮辱しますのっ！？」

「さっきまで、こっちの国を侮辱していたのはどっちだっ！？」

どんどんヒートアップしていくこの二人。やがて、セシリアは一夏の机の上に両手を叩きつけるとさっきとはうって変わって落ち着い

た・・いや、余りの事に怒りが頂点に達し逆に落ち着いたと言った方がいいか。ともかくそんな態度で

「決闘ですわ・・」

「いいぜ、四の五の言うより判りやすい」

そう言ってお互いににらみ合う一夏とセシリア、緊迫した空気に周りがざわめきだす。が、この鬼教官にはそんな事は微塵も関係なく

「落ち着け、バカども」

「いたっ！」

「った」

おなじみ出席簿の一撃で二人をクールダウンさせると教壇の前に立ち

「話は決まったな。勝負は一週間後の月曜、放課後第三アリーナで行う。折角だ、織斑、天乃宮、オルコットの総当たり戦を行い一番成績の良い者が代表を務める。各自準備をしておくようにいいな？」

「ああ」

「望むところですわ！」

「・・・って、俺も！？」

二人がドンとこいと言う様に力強く返事をするなか真琴だけは間の抜けた声を上げていた

第6章ー嵐の前の静けさ、その心

三人によるクラス代表決定戦の開催が決定されたその次の日、真琴、一夏、箒の三人は同じ机で昼食を取っていた

「そういやさぁ・・」

ご飯を口に運びながら一夏が口を開くと箒は無言のまま一夏に顔向け

「ＩＳの事教えてくれないか？このままじゃ俺来週何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

「ていうか、勝算ゼロであんな事言ったのかよ・・・」

流石のこれには真琴も呆れた。あれだけ堂々と宣戦布告を受けたのだから一夏には何かしらの策があると思っていたのだがどうやら完全にその場の勢いだけで言ったらしい

「そこを何とか頼むっ！」

昨日の今日で再び、箒にヘルプを求める一夏。しかし、箒は何も言わずに味噌汁を飲んでいた。無言の箒に一夏が再び口を開こうとした直後

「ねぇ、キミって噂の子でしょ？」

そこには一人の女子生徒、胸元のリボンの色からして3年生だ。と

言うか

（なんて無謀な・・ほら、箒の表情がより一層険しくなってる）

そこには眉間に皺を寄せ、目に見えて不機嫌な箒の姿。しかし、そんな彼女を無視して先輩は話を進める

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど本当？」

「ええ、まぁそうですけど」

流石、数少ないイレギュラー（男二人）の話題。噂の広まるスピードがものすごく早い

「キミ達さ、ＩＳの稼働時間どれぐらい？」

「えっ、試験の時だけですから大体２０分ぐらいです」

「稼働時間に比例して上達するのよ。絶対無理ね」

代表候補生ともなれば、ここに来る前からＩＳを動かしている。それもかなり長い時間、つまるところの経験不足と言う訳だ

「私が教えてあげようか？ＩＳの事」

一夏にとってはこれは願っても無い事だ。目の前の幼馴染は何も言わないし、何より３年ならば知識も経験もそれなりに豊富。教師とは十分だ

「はい、ｚ「それなら私が教えますので結構です」え？」

ぜひ、お願いしますと言おうとした矢先、今までだんまりだった箒が口を開き、二人がそちらに目を向ける

「あなたも一年でしょ？わｔ「私は・・」」

「・・篠ノ之束の妹ですから」

先輩が何か言おうとした瞬間、箒は再び言葉を遮ったかと思うと今までに無いぐらい不機嫌に言い放った。箸の持つ手も心なしか震えており今にも箸をへし折りそうなぐらいだ

「篠ノ之・・って、ええっ！？」

先輩が驚くのも無理は無い、篠ノ之束と言えばＩＳを開発した所謂ＩＳの権威とも言える人物。そんな彼女の妹ともなるとその技量や知識は計り知れない

「そ、そう・・それなら仕方ないわね」

敵わないと踏んで席を立ちその場を後にする先輩。

「・・なんだ？」

そして箒はというと邪魔者がいなくなったのか何時もの表情で焼き魚をほぐしていたが二人の視線を受けて、尋ねると

「なんだ、って・・いや、教えてくれるのか？」

さっきまでは無言だったのにどんな心境の変化だろう？一夏には判

らなかったが真琴には一発で判った。

「そう言っている。今日の放課後剣道場に来い、腕が鈍っていないか確かめてやる」

「どうして、そこまで弱くなっている！？」

「中学はずっと帰宅部だったからな・・竹刀を握ったのなんて久しぶりだ」

学園敷地内の剣道場、そこで一夏と箒は剣道の手合わせをしていたが結果は一夏の惨敗、頭の防具を外した箒が一夏に問い詰めると一夏が、竹刀を片手に持ち軽く振りながら言葉を返した

「ところで、これとＩＳの何の関係が・・「直す・・」はい？」

昔は自分が手玉に取られていたぐらい強かったのに今ではこんなにも弱くなってしまった。そして何より小さいころはあんなに一緒に打ち込んでいた剣道をこうも簡単にやめてしまっていた、まるで剣道と言う自分と一夏の繋がりがなくなってる様でそれが許せず、箒は拳を震わせ呟いたかと思うと突然竹刀の切っ先を一夏に向けて

「鍛え直す！これから毎日放課後３時間、私が稽古をつけてやる！！」

「いや、俺はＩＳの事を教えてほしいって頼んだんだが・・」

「それ以前の問題だ！！」

たとえＩＳがどれだけ高性能でもそれを扱うのは人間だ。つまりはその人間の射撃技術や剣術と言った戦闘に必要な技量が追いついていなければどんな高性能ＩＳでも宝の持ち腐れになる

「大体、悔しくないのか？ＩＳならまだしも剣道で女に負けるなんて」

「そりゃ、まぁかっこ悪いとは思うが」

「なら、明日から早速特訓だっ！いいな！！」

そう言って、剣道場から出て行く箒。一夏は暫く箒が出てった方を見ながら

（強くなったなぁ箒、昔は俺の圧勝だったのに・・流石全国大会優勝者と言うところか）

いや、単純に何年も剣道から離れたが為に俺自身も弱くなったからか・・そう、思い直すと一夏は竹刀を握りなおし

「・・・やるか」

そう言って人気の無い道場で素振りを開始した

その頃、寮の裏庭では真琴が拳を構え、目を伏せていた。あの後、二人に気を使ったのと何より少し一人で考え事をしたかった為、二人と別れここに来ていた。やがて、誰かを相手にしているかの様に拳や蹴りを放つ。裏拳、アッパー、上段回し蹴りにその回転の勢いをそのまま使って今度は逆の足でミドルの後ろ回し蹴り、そして最後に正拳付き

（どうにも調子が狂う・・）

最近どうも、自分の本音を発露する事が多い。原因は判っているあ(セ)の女(シリア)だ。今の社会の典型とも言える様な彼女と関わってからどうにも自分が押さえ込めなくなっている。今でもそうだ。別に適当にやって負けてしまえばいいのにこうして自分の調子を確かめるように拳を振るっている。万一勝ちでもしてクラス代表になったらそれだけで彼女からいらない因縁を買うのは目に見えている。だと言うのにこうして自分は勝つ準備をしている

真琴は近くにあった木に近寄ると、おもむろに上段後ろ蹴りを放つ。ダァンッ！と言う音と共に倒れこそしないが木がゆれて葉っぱが数枚落ちてくる

「・・無駄に良好だな。全く」

（自分を抑えて生きるのって結構難しいのかもな・・）

真琴は木に自分の背を預け考え始める。今までの自分の生き方、そしてこれからの事を。今まではこれでやっていけると思っていたがＩＳ学園に来てそれが綻び始めている

（確かめる、か・・・）

戦いと言うのは心を知るいい機会、親父が修行の中で教えてくれた事だ。人はそうした極限な中でこそ自分の本当の思いを悟り、それを発現させる。つまり全ては、代表決定戦の日、その時にきっと何かしらの答えが出る。そう思い、修練をやめて部屋に戻ることにした

第６章ー嵐の前の静けさ、その心（後書き）

次回はいよいよ選抜戦開始、つまりはオリ主の専用ＩＳもやっと登場します。この辺りからキーワードにあるもう一つの原作タイトルを参考にした単語がちらほら出てきます

第7章ー羅刹対蒼き涙、矛盾砕け散る時

「織斑、天乃宮お前達のＩＳだが準備まで時間が掛かるぞ」

「え？」

代表戦５日前、一限目の授業開始前に千冬が二人に向かって言った、言葉に一夏が間の抜けた声を上げる

「準備って・・学園にだってＩＳはありますよね？」

と言うか無きゃ実践訓練が行えない。だからＩＳ学園は二人が試験の時にも使った日本産の量産型ＩＳ「打金」が常備されている。だから二人もてっきりそれを使って試合に臨むものだと思っていたが

「二人は突然の入学だったからな。予備の機体が無い、だから学園の方で専用機を用意するそうだ」

（またこの理由か・・・）

真琴の言うまた、とは学園の施設利用やそう言った関係の話だ。実際、俺と一夏はまだ大浴場を使えないし、一番困ったのは部屋の関係だ。本来なら入学するはずなんて無かったはずの事に学園側もこの突然の事態に、二人の部屋を用意するのが大きく遅れた。その為、当初は暫くは真琴も一夏も自宅からの通学の予定だったが学園側、正確には政府が二人の保護と監視を目的とし、一時的な措置として正式な部屋が決まるまでの間は片方は来客用の個室、もう片方がなんと他の生徒、すなわち女子との相部屋となってしまった。そして真剣勝負（ジャンケン）の結果、個室をとったのは真琴という訳だ

閑話休題

「専用機？一年のこの時期に？」

「それってつまり政府からの支援が出るって事？」

その一言に静かになっていた教室がざわめき出す

「よくわかんねぇけど、専用機があるってそんなにすごいのか・・・？」

が、当の本人達は何の事だが判らず真琴が疑問の声を上げると

「それを聞いて安心しましたわ！」

答えは意外な所から帰ってきた

「クラス代表選抜戦。私の圧勝なのは目に見えてますが私は専用機、あなた達は訓練機ではフェアじゃありませんもの」

「ふぅん、やっぱりあんたも専用機持ちなのか？」

まぁ、どうやら専用機持ちはかなりすごい事らしくならば国の代表やその候補生と言った特別な人物が持つ物だと何となく予想はついた。そんな真琴の問いにセシリアは待っていましたと言わんばかりに得意げに胸を張ると

「当然ですわっ！私、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生。つまり、現時点で既に専用機を持っていますの。そしてこの世

界に存在するＩＳは僅か４６７機。つまり、その中でも専用機を持つと言うのは全人類６０億の中でもエリート中のエリートなのですわっ！」

「４６７機！？たったそれだけ？」

「ＩＳって各国で量産されている訳じゃないのか？」

「それが、ＩＳの中枢に使われているコアと呼ばれる部分の技術は開示されていないんだって。しかもコアの部分は完全なブラックボックス、その為今コアを作る事が出来るのは篠ノ之束博士のみ。そしてどう言う訳か博士は一定数以上のコアを作るの拒絶しているの」

真琴が改めて尋ねると今度は真琴の隣の生徒がその質問に答えた

「つまり、各国や企業は限りあるコアの中でＩＳを作り運用してくしかないって訳か・・」

「本来なら専用機は国家や組織に所属している者のみに与えられる。が、お前達の場合は事情が事情だ。情報収集もかねて専用機が与えられる。判ったか？」

千冬さんが前に言ってた実験動物程ひどくは無いかもしれないがこれも一種の実験か・・まぁ、明らかな人体実験をさせられるくらいならこの方がマシだ。それに

（さっきこいつの言ったとおり、これでお互いに言い訳が出来ないフェアな状況になったわけだしな）

自分や一夏や相手が専用機で性能差がありすぎたから、セシリアの

場合は相手が訓練機だと侮って油断しすぎたからとそういった言い訳はまかり通らなくなった。後はＩＳ操縦者としての経験の差のみだ。戦いに言い訳など不要。勝つか負けるか、絶対的な勝者と敗者が居るだけだ。その言い訳に使えそうな要素がなくなったのは真琴にとってはありがたかった。

（ここら辺は親父にきっちり仕込まれたのが原因だな・・）

と、闘志を燃やしている自分に気づくと苦笑を浮かべるしかなかった

（専用機というぐらいだ。打金よりは戦いやすい機体だといいがな）

そして迎えた代表選抜戦当日。真琴、一夏、箒三人はピットエリアで二人のＩＳの到着を待っていた。そんな中、真琴は無言で目を伏せながらそんな事を思っていた

元々、ＩＳというのは多種多様な兵装を装備し、それを使って戦うものだ。武器も何も使わずに拳や足だけで戦う人は少ないし、それをメインにしている奴はそれこそ居ないだろう。そして武道家というのは下手な鎧や装甲とかを着けたりはしない。これらの理由で真

琴の戦い方と従来のＩＳの性能と言うのは少しミスマッチという訳だ

『織斑君、天乃宮君！来ました！二人の専用ＩＳ』

その時、別室で３人の様子を見ていた山田先生から放送が係り、ピットエリアの二つの搬入扉が開く。そこには白と黒の二機のＩＳ白い方は何処か騎士鎧をイメージさせ、黒い方は軽鎧に手甲と脚甲がセットとなった機体だ

「白い方が織斑君のＩＳ『白式』で黒い方が天乃宮君のＩＳ『羅刹』です

「白式と・・」

「羅刹・・」

「よし、二人とも準備をしろ。アリーナを使える時間は限られているからな、二人ともぶっつけ本番でモノにしろ。そして天乃宮、お前の場合は初戦からだ。初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）は実戦でやれ」

二人はお互いに目を合わせ頷きあった後にそれぞれのＩＳに触れる

「あれ？」

「どうした一夏？」

「いや、なんでもない・・」

疑問の声を上げたのは一夏だ。真琴は再度一夏に目をやり、箒は声を掛けると一夏はなんでもないと首を横に振り白式に向き直った。

そして、真琴もまた同じ違和感を感じていた。それは

（初めてＩＳに触ったときと感覚が違う？）

試験会場でＩＳに触れた（真琴の場合は軽く蹴った）は頭の中に様々な情報が一気に流れ込んでくるような感覚だった。だが、目の前の自分の専用機は違う。情報が頭に入ってくるのは同じ、けれどもこちらの場合は流れ込んでくるというより自分の中に染み渡っていく。そんな感覚だ

（量産機と専用機の違いって奴か？）

そう思いながらも特に問題は無いのでそのまま二人はＩＳを装着する。直後にそれぞれの眼前にＩＳのステータスや状態を表すディスプレイが表示され。その次に山田先生から送られてきたデータが映し出される

「そしてこれがセシリアさんのＩＳ『ブルーティアーズ』、遠距離型のＩＳです。ＩＳには『絶対防御』と言うシステムが付いています。これはどんな攻撃を受けても最低限操縦者の命は守られる様になっています。けれど、これはシールドエネルギーを極端に消費します。判っていますね？」

「判ってますよ。試験の時みたいに攻撃を防ぐのはシールドバリア任せ、なんて戦いはしませんから」

ＩＳバトルの基本ルールはシールドで攻撃を防いだ時と絶対防御の発動時に減少するシールドエネルギーが０になった段階で負けとなる。試験の時、真琴はそれを知らずシールドバリアはただ単純に攻撃を防ぐものと勘違いをしたのが敗因だ。相手の攻撃を防いでると

思ったがその実、真琴のＨＰ（シールドエネルギー）はガリガリと削られていたわけだ

「二人とも気分はどうだ？」

「ああ、悪くないさ」

千冬の言葉に一夏は自信に満ちた表情で頷き、真琴は２，３歩歩いた後に拳を突き出した。生身の時よりも大きい空気を切り裂く音に真琴は拳を自分の顔の前に持ってきて

「いい感じだ、少なくても打金の時よりは遥かにマシだ」

見た目からしてこの羅刹は格闘能力に重きを置いているらしい。打金の時より拳のキレが良い。格闘家がつける数少ない装備、手甲と脚甲に似たつくりをしているから当然かと納得するが

（とは言え、この装甲による手足の重さは流石に専用機でもどうしようもないか。まぁ、これ以上は我が侭というものか）

フッと、笑みを浮かべた後真琴はＩＳの発射カタパルトに立ち二人の方を向くと

「さて、とそんじゃ行ってくるわ」

「ああ」

「頑張れよっ！真琴」

そして、競技場に目をやるとそのままカタパルトから発進。そのま

ま空中へと飛び、余りの勢いに少しバランスを崩しながらも静止して即に待っていたセシリアと対峙する

「最後のチャンスをあげますわ」

「ん？」

「私が一方的に勝つのは自明の理、今ここで謝ると言うのなら許してあげない事もなくってよ？」

軽く上昇しながら態度と見た目共に上から見下ろすようなセシリアの言葉。真琴は表情を変えずにそれを眺め、やがて周りを見渡した後

「冗談。んなことしたら折角見に着ているオーディエンス（クラスメイト）が興ざめするだろうが」

そんな挑発的な言葉が自然と口を突いて出てきた

「そう・・残念ですわ。ならば、お別れですわねっ！」

そう言って自身の兵装である大型ライフルの銃口を向けて引き金を引く。それが開戦の合図となった

「ちっ・・！」

放たれたレーザーは2発、1発目は辛うじて避けるも2発目は避けきれず彼の腹を捕らえシールドがそれを防ぐ

「さぁ、踊りなさいこの私、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で」

結論から言うと羅刹は専用機と言うだけあり打金よりは遥かに高性能だ。しかし、その分

（こいつの機動力と反応速度に俺が追いつけていない・・・っ！）

中々、自分が思うとおりに立ち回ることが出来ない、自分が機体に振り回されている感が否めない

（だったら・・！）

下手な事は考えるな。兎に角、自分の間合（クロスレンジ）いにあいつを捉える！

多少の直撃は気にせず一気にセシリアとの距離を詰めようとする真琴

「しぶといですわね・・・けれど無駄な足掻きですわ」

直後、セシリアのＩＳの名前の大本となったビット兵器。ブルーティアーズが射出。真琴を周りを飛び交いレーザーを撃ち始める

「っのやろ・・！」

ブルーティアーズからの攻撃が加わり、完全に防戦一方になっている。が、機体に振り回されている分、無駄な動きが多く、それが蓄積された所で遂にブルーティアーズの内一機の攻撃が真琴を捉える

「しま・・っ！？」

そして、相手がひるんで止まったその一瞬残りの３機が三角刑の形で真琴を囲み一斉射が真琴を襲う

（実力が違いすぎる・・・）

一斉射を受けて地に落ちていく中、真琴はそんな事を考えていた。相手も自分も同じ専用機ならばこれは完全な経験と実力の差だ。はっきり言って勝機も見えないし勝てる気もしない・・だと言うのに

（ここら辺でやられて引き下がれば、それで終わりだってのに）

そうすれば、あいつだって満足して俺に突っかかってくる事もなくなるだろう。自分が今までしてきた生き方をするならそうするべきなのに

（なんでこうなんだろうな・・）

戦いの中は余計な事を考える余裕は無い。雑念やそういった類は無くなり、むき出しの心が表れる。そして真琴のむき出しの心にある思いは

負けたくない、勝ちたい・・屈したくないと思う気持ちだった

そこまで考えたところで真琴の体は地面に叩きつけられ、真琴は片膝立ちになり、頭はうな垂れていてその表情は見えない。

（まぁ、ＩＳ学園に来てから何となくは判っていた）

今までの生き方は自分には無理だったんじゃないかと。今の社会の風潮に煽られ折れたくないが故の無難な、そして女性の無駄な衝突を避けた生き方は。現代社会を象徴した様なセシリアと出会い、彼女のやり取りの中で少しづつ現れた自分の本音と態度。そして力ある女が男を下す、そんな現代社会の縮図とも言うべき今のこの状態たくさんの男性が折れて屈していった自分が尤も避けようとしていた状況。その中でも自分の心は微塵も折れていない

（やっぱし、俺は親父の息子だな）

ふと、口元に笑みが浮かぶ。理不尽な社会の煽りを受けてもその状況に絶望せず、屈せず、むしろ笑い飛ばして抗う。そんな自分にっとて尤も身近でそして目指すべき男の精神は自分の中にも受け継がれていた。ただ、それに自分が気づかなかっただけだった

「時間の無駄でしたわね。ならば、これでフィナーレにして差し上げますわっ！」

セシリアの声が響いた直後、真琴の周囲をビットが囲み、そして放たれる十字砲撃。それが直撃する直前

偽りの仮面（ペルソナ）を脱ぎ捨て

その顔を上げた

第7章ー羅刹対蒼き涙、矛盾砕け散る時（後書き）

別名、主人公が吹っ切れるお話です。漸く主人公を自分の考えてるキャラで動かせる・・

第8章ー羅刹対蒼き涙、修羅の目覚め。そして決着の時

初めてあったとき時からそうだった。周りに対する無関心に近い態度。特に女性との接触に対してはその傾向は特に強い。まるで無駄に機嫌を損ねないように下手に関わる事を避けているかのような態度。媚びへつらいこそはしなくても

（結局、あの人と同じ……）

名家に婿入りした事でいつも母の機嫌ばかりを伺い、媚びへつらってばかりの父と……

（こんな男に関わっているヒマはありませんわ……）

自分にはなすべき事がある。自分はもっと上に、もっと強くあらねばならない。父と同類の有象無象共から両親の残したものを守る為に

「時間の無駄でしたわね。ならば、これでフィナーレにして差し上げますわっ！」

だからこそトドメとばかりにセシリアは真琴に向けてビットの十字砲火を放つ。四方から迫るレーザー、しかし彼は動く様子は無い

（これでおしまい……っ！？）

攻撃があたる直前に見えた彼の表情、それにセシリアは息を飲んだ。直後、レーザーが直撃しその姿は砂煙に消える

「気のせい……ですわよね？」

煙が晴れた頃には心を折られ、地に伏している彼の姿がある筈だ。そう思った直後、砂煙の中から何かが飛び出し、それは地面に着地する

「全く……今の今まで無駄な生き方をしてたな。あ～情けねぇ」

「なっ！？」

セシリアは今度こそ驚かされた。砂煙から飛び出してきた彼のＩＳの形状が変化していた。腕や足の装甲は一回り、二回りも細くなり、手の甲には紫の宝玉それを中心に十字に細く走っているスリット。脚甲は前の方に３本、踵の部分に１本の長い爪の様なモノが装着され、まるで鳥の足の様な見た目だった。肩当も一つだけだったのが同じものをもう一つ、角度を変えて重ねた様なフォルムになっている。頭にも鉢金の様な装甲がおでこよりも少し上の部分に装備されてそこから二本の細長い黄色の三角形の、竜の角を薄く板状にしたイメージの飾りがあしらわれ、今まで黒一色だったＩＳ装甲にも縁の部分等に赤いラインが走っている

直後、彼の前に初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）の終了を告げる画面が表示される

「まさか……第一次移行（ファーストシフト）っ！？　今まで初期設定の機体だけで戦っていたと言うの！？」

「ん～、そのファーストシフトってのはよく判らんが、まぁ初期設定ってのはそうなんだろうな。なんせこちとらぶっつけ本番で、即バトルだったからな」

最早唖然として何も言えない。と言うのもＩＳはそれ自体が意思の様なモノを持ち、装着時間に比例し操縦者の動きや癖と言った特性を学習し、己を操縦者にあわせ最適化させるからだ。そして専用機はその過程でその姿を変える。それが第一次、第二次移行だ。その内、第一次移行を迎えることで専用機はホントの意味で自分専用となる

「すごいな、さっきまでの拳や足の重みが嘘みたいに消えてる……」

自分の手を握ったり開いたりしながら

「なるほどな……“あんた”も負けたくないんだな？」

自分の手のひら、いやＩＳを見ながらまるで相棒に語りかけるかの様に穏やかな笑みを浮かべ口を開く真琴。第一次移行を迎えたのは単純に時間的な偶然、けれど、それでも真琴にとってはギリギリだったあの状況の中、羅刹も負けたくないとその姿を昇華させた様に思えた。そして拳を握りなおすとセシリアに目を向ける。さっきまでとは全然違う、力強さと不退転の意思を持った瞳を

（この男は誰……？）

いや、正確にはその質問は意味を成さない。目の前に居る男は間違いなく天乃宮真琴だ。けれどもそう思わざるを得ないほど彼の雰囲気は一変していた。覇神拳の起源は戦国時代にまで遡る。歴史の表舞台にこそ姿を現していないがその時代に幾つかの武術の流派がありそれぞれにそれを体得した者達がいた。その者達は自身の流派、もしくは自分自身こそがが最強であると証明するべく、戦の中でその拳を技を交え続けた。強いものが生き残り、より高みを目指せる。戦国時代が過ぎても度重なる争いの中に彼らの姿はあった。常に抗

い、敵を撃砕し、戦い続ける事から彼らを知る数少ない者は彼らの事を総称して“修羅”と呼び、彼自身もまたその名を受け入れた。時代が移り変わり戦争が少なくなっていく中次第に彼らの姿を見る者は居なくなった。いや、正確に数多の人々の中に埋もれていった。そして覇神拳はそんな修羅が修める流派の一つだった。無論、今の時代にそんな生き方はまかり通らない。けれども真琴はこの戦いに修羅の精神、その一部を持ち出す。それは決して屈せず、いかなる相手にも体が動く限り抗い続ける意思

「さてっ、待たせたな。こっからが本番だ。見せてやるよ……覇神拳を修めた武道家……修羅の戦いって奴をなっ！」

だからこそ、真琴は声高らかにそう叫ぶ。そしてそれに呼応するかの様に彼のＩＳの腕の装甲が展開し、宝玉には習字の様な字体で左に羅、右に刹と羅刹の文字が浮かび、肘から拳、足から膝にかけて赤紫の炎の様に揺らめくエネルギーが覆う。そしてそのまま一気にセシリアとの距離を詰める

「っ！？　させませんわっ！」

そこで漸く我に返ったセシリアもそれを迎え撃つべく、再びブルーティアーズを使い迎撃に移る。けれどさっきまでとは全然展開が違った。動きに無駄が無い。最小限のそれでも早い動きでビットからのレーザーを避ける

「落ちろっ！」

あまつさえ、その過程でビット一機に蹴りを叩き込み撃墜までしてみせた。そうしてビットの包囲を抜けきり、真琴はクロスレンジにセシリアを捉える

「っ！？」

「ふっ飛べぇぇーーーーっ！！」

そして、遂に真琴の拳がセシリアにヒットする。放たれるボディブロー、しかもそれは自分のシールドバリアを硝子のごとく打ち砕き、本体に直接ダメージを与える

「くぅっ！」

絶対防御が発動し、自身のシールドエネルギーが大きく削られ、後方へと吹っ飛ぶセシリア、その途中、体を縦に一回転させて、体制を整えて、そして遠くに居る彼の姿を見る。その姿に、自分に向けられる瞳にセシリアの胸は二つの意味で高鳴る。一つは戦慄、このＩＳバトルは競技種目、死ぬ事は無い。けれどもまるで命がけの戦いに望むかの様に自分を倒さんとする雰囲気、それに恐怖と戦慄を感じた。そしてもう一つは……

（なんて気高く、力強い……）

もう一つは歓喜。この男はあの人と同類だと思ってた、けれど実際は全然違った。この人こそ、自分が半ば諦めながらも捜し求めていた理想の男性では無いか？だって、凛とした彼の姿はこんなにもカッコいいではないか

「“真琴さん”」

だからこそセシリアは彼を認め、その名を呼ぶ

「ん？」

「まずはあなたに謝らせていただきますわ。あなたの事を見くびった事を・・・」

「へー、どういう風の吹き回しだい？」

「貴方は強いと認めたと言う事ですわ。ですからこそ・・・」

それでも……

「驕りも何も無い、私の全力を持って貴方に勝ちますっ！！」

それでも自分は負けない。たとえ相手が捜し求めた相手だとしてもそれはそれだ

「……」

戦いとは裸の心と向き合う機会、けれどそれは何も自分の心だけではない。戦っている相手の気持ちや想い、その一端をぼんやりとだが感じる事も出来る。真琴もまた彼女の瞳の奥に、何かを見た。明確な事までは判らない、けれども彼女にも譲れないものがある事を、その為に強くあろうとしてる事。それだけは感じた

「いいぜ、“セシリア・オルコット”。こっからが互いにホントの戦いだ。全力のなっ！！」

だからこそ真琴もその名を呼ぶ。どちらとも無く浮かぶ不敵な笑み。それが合図となりセシリアはライフルのトリガーを引き、真琴はセシリアに向かって翔ける。レーザーが飛び交い、真琴がそれを

避ける、そしてクロスレンジに相手を捉えれば拳を放ちセシリアはそれを舞うように避けて距離を置く。さっきまでとは全然違う、激しさを増していく攻防に試合を見に来ていた生徒達は最早、言葉も無くそれを見ていた。そして全員が、いや、正確には千冬以外は気づいていなかった。互いにヒットする攻撃、その全てに対しセシリアはシールドを砕かれ、真琴の方はシールドそのものが機能していない事に。

『羅刹断撃』、これこそが羅刹の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）。機体の機動力と攻撃性能を強化すると同時に自身のＩＳにシールドエネルギーを相殺する反シールドエネルギーを駆け巡らせ、それを展開装甲を開いた腕や足から噴出させて纏う事で相手のシールドもろとも粉砕し大ダメージを与える能力だ。しかし、その際は自身の反シールドエネルギーで自分のシールドエネルギーを消耗しない様に絶対防御に関するシステムを除いた全てのシールドエネルギーのエネルギーラインを一時的に遮断。その為、発動の代償とし、自身のシールドバリアも一切機能しなくなると言う守りを捨てた能力だ。急速に削られていく両者のシールドエネルギー。そして遂に終わりの時は訪れる。クロスレンジ、真琴は拳は引き、セシリアはブルーティアーズの残り2機、迎撃用のホーミングミサイルを発射態勢に移し

「俺の……」

「私の……」

そしてお互いに最後の一撃を放つ

「「勝ちだっ（ですわっ）！！」」

クロスカウンター、互いの攻撃が直撃し、ミサイルの爆煙一瞬だ

け二人を包むと、そこから両者が現れ、真琴は地面に落ちセシリアはアリーナの壁に叩きつけられる。

セシリア：ダメージ１２６、実体ダメージ－高、シールドエネルギー残量１
真琴：ダメージ１１３、実体ダメージ－高、シールドエネルギー残量……０

二人の画面にそれぞれの状態が表示された所でセシリアはホッとしたように、真琴は目を伏せて歯をむき出しにして笑みを浮かべた

『試合終了、勝者セシリア・オルコット』

二人のぶつかり合いは辛くも蒼き涙にその軍配が上がった

第8章ー羅刹対蒼き涙、修羅の目覚め。そして決着の時（後書き）

まあ、判っている人は判っていると思いますが羅刹のイメージはもろにアルクオンです。

第9章ー戦いの終えて・・

「これで、あいつがクラス代表か・・・」

時は夕暮れ、寮への道を歩く二つの人影、その内の一人・・一夏が呟いた。あの後行われた選抜戦第二戦一夏対セシリアの戦い、結果から言えばセシリアの勝利。だが、それも一夏が自身の機体・・いや、武器のスペックを理解して無いが故の自爆が原因だ。白式の初期兵装にして唯一の武器「雪片弐型」は羅刹の羅刹断撃同様に相手のバリアを無効化する能力を持っている。しかし、羅刹断撃が自身のシールドバリアーを捨てる事で発動するのに対し、こちらは自身のシールドエネルギーそのものを消耗する。必要な時のみ使い必要ない時はオフにする、そうやって運用するのがセオリーなのだが一夏はそれに気づかず常時使用し続けた。その結果、自身のシールドエネルギーは一気に0になったと言う訳だ

これで、セシリアの2連勝。一夏対真琴の試合を待たずしてセシリアがクラス代表になったと言う事である

「さっきからなんだよ?」

そしてその帰り道、一夏は隣からの視線を感じると隣を歩いていた少女、箒の方を見て口を開くと箒は一夏から視線を逸らして

「その・・なんだ、負けて悔しいか?」

「そりゃ、まぁ悔しいけど・・」

「そうか・・あ、明日からはISの訓練も入れないとな」

「だな・・・」

そこで会話は一旦途切れ・・少しの間無言の時間が過ぎる。そして今度は箒の方から口を開いた

「そ、その・・一夏は私に教えてほしいのだな？」

普段の箒とは違う、少し歯切れの悪い言い方で尋ねると一夏は当たり前と言う様に

「そりゃまあな。他の女子よりは気が楽だし束さんの妹だしＩＳの事にも詳しそうだし」

「そうか・・なるほどな。フフッ仕方ないな」

口ではそう言ってはいるものの箒の表情は嬉しそうで頬を僅かに赤に染めて笑みを浮かべている

「よしっ！では、この私が教えてやろう。これからは放課後は必ず空けておくのだぞ。いいな？」

まるで、不安が無くなった・・とでも言うかの様に次の瞬間には何時もの調子を取り戻していた。そんな箒の変化に一夏は少し戸惑いつつも「おう」と言葉を返して、二人は再び帰路に着いた

「・・・・・」

自室の浴室。そこでシャワーを浴びているセシリアは心ここにあらずな、そして何処かうっとりともした表情でシャワーから落ちてくる水滴を浴びていた

試合の勝敗よりも、選抜戦の結果よりも自分の心を捉えて離そうとしない存在

「天乃宮・・・真琴」

初めて出合った時は父と同類のひどい男性だと思っていた。けれど、ＩＳを纏いぶつかり合ったあの時、それが彼が自分で纏った世を忍ぶ仮面だと知った。その仮面の下に眠っていた彼の姿、自分が求めていた存在。それを言うならばあの織斑一夏も同じだ、むしろ彼は初めてあった時からそれを表に出して自分に臆する事も無く喰ってかかってきた。けれど今までの姿とのギャップ、あのときに見せた戦慄を感じるほどの闘志、これらがセシリアの心に真琴の存在を深く刻み付けていた

「フッ、ハッ、セイッ！」

選抜戦から一夜明け、寮の裏庭では真琴が前と同じ様にイメージト

レーニングに励んでいた。そして目を開き、一瞬だけ間を置くと

「スーッ・・ハッ！」

ワンツーパンチに始まり、拳を上から下に振り下ろし、体を回転させて掌底、更に１８０回転させてその勢いを乗せたアッパーこれらの流れを止まる事無く一気に放つ。これは覇神拳の技の一つ『機神連拳』、最初の二つで相手を怯ませ、本命の掌底とアッパーで相手を仕留める初歩の技

「うん・・好調好調！」

選抜戦の時と違い、自分の調子に満足しながら黒いフィンガーレスのグローブ、待機状態の羅刹が装着された手の手首をもう片方の手で掴み、掴んでない方の手を開いたり閉じたりしていると、後ろの方から拍手の音が聞こえ首だけを後ろに向けると

「朝から精が出ますわね」

「セシリアか」

そう言って、真琴は今度は体ごと彼女の方に向き直った

「もしかして、毎日こうして特訓を？」

「今までは朝の準備体操程度だったんだけどな。でもＩＳで戦う以上は本格的に鍛錬しといた方がいいと思ってな」

「そうですか・・・」

そこからはお互いに無言の空間が続く

「あの・・・」

「ん？」

「真琴さんは今までどうして自分を押さえ込むような生き方を？」

こんなにも強い彼がどうしてあんな情けない姿で生きてきた・・いや、生きようとしていたのか。おずおずとセシリアは口を開き真琴に尋ねると真琴は「ん～」と暫く考えて

「まぁ、あれだな。簡単に言えば自信が無かった・・って奴かな」

「それはどういう・・？」

「今のご時勢、抜きん出たり下手に目立つ男性は叩かれる。俺はガキの頃からそんな男をたくさん見てきたし、俺の親父もその一人だった」

「・・・」

やがて、真琴は木に背中を預けるとゆっくりと話し始め、セシリアは黙って真琴の話に耳を傾けている

「そして女性にヘコヘコした情けない男が居るのも知り、お袋からあんな情けない男にならないでくれとも言われた」

それはセシリアにも良く判った。親の残した財産目当てで媚を売って来る男が自分の周りにもたくさんいたし、何より自分の父親がそ

うだった。そして幼いながらも自分もそんな父には良い感情なんて覚えなかった

「あんな、情けない男にはなりたくない。かといって男の立場が弱いこの社会、下手に前に出たり、食って掛かれば叩かれる。叩れて、叩れて最後には負ける、それもゴメンだった。だからこそ俺は自分を抑え、無用な衝突を避けて2歩も3歩も引き下がった控えめな人生を生きようって決めたんだ。質素でも平凡でも構わない、それでもある程度は自分と言うものを持って生きていける方法を自分なりに探した結果が・・」

「・・・今までの真琴さんの態度、とうわけですか」

本音や自分の意思を押さえ込んだ段階で自分も何もあったもんじゃない。そして、相手との衝突を避けるなんて結局、相手の機嫌を窺って生きてるのと同類だ。けれど彼は・・彼の場合は動物の赤ちゃんが初めて目にした相手を親と思い込んでしまい、相手がそれを違うと否定しても心はそれを受け入れられない様に、彼もまた幼い頃からこの社会で生きてきて、それを様々な形で直接目にし、自分にとって一番近しい存在がそうなったが故に今の時代、男は女に勝てないのだと心の中にそうした観念が刷り込まれた。それでも母に言われた事を守りたいと思い、彼なりに必死になっていた

「私、何も知らずに貴方の事をダメな男だと思い込んで・・・本当に申し訳ありませんでした」

彼がどんな想いを持って生きてきたのか。それを知ろうともせずにただ情けない奴だと見下してた自分がとても恥ずかしかった。だからこそセシリアは改めて謝罪の意を告げ、頭を下げる

「謝らんでいい。俺も今になって思うとなんとも矛盾した情けない生き方だったと思うよ」

目の前に立ちはだかる壁、それに立ち向かう勇気が無く・・いや、無いと思い込んでいた。振り返ってみれば本当に情けなかったと・・・

「今まで避けていた状況に立て続けに直面してみて、自分を抑える生き方は俺には無理だと、むしろそれに真っ向から勝とうとする、なんとも損な性分だったんだって改めて思い知った」

顔を上げたセシリアの目に映ったのはそう言ながら苦笑を浮かべ軽く肩をすくめる真琴の姿。しかしその表情は何処か楽しそうでそんな彼の表情を見たセシリアもクスクスと笑い返すと

「ですがたとえ損な性分でも、私的にはそちらの方がステキだと思いますわ」

「そうか？まぁ、セシリアと拳を交えたお陰でもあるさ」

私の方は拳ではなく銃火器なんですが・・とツッコミたくもなったが、それ以上に自分のお陰だと言われた事の方が嬉しくて

「そう、ですか」

それを表す言葉が見つからず、それでもセシリアはその顔に今日一番の笑顔を浮かべそう返した

自分を偽る仮面を脱ぎ捨て、少年はやっと自分の本当の心で生きて行く事を選んだ。その拳に在る新たな力と、新たな友と共に

第９章ー戦いの終えて・・（後書き）

４月の末遠出先で漸くＩＳ１～７巻全巻入手しました。代表戦の話はより原作を壊さないように書いていこうと思います。と言うわけで次回はチャイニーズ幼なじみ登場です

オリジナルＩＳ紹介（前書き）

単一仕様能力や着たい性能に関しては完全に独自理論、独自設定です。

オリジナルＩＳ紹介

ＩＳ名：羅刹

待機状態：黒のフィンガーレスグローブ

操縦者：天乃宮真琴

詳細：一夏の白式と同時に開発された第４世代のにして真琴の専用機。腕と足の装甲部分を近接用武器と同じ材質で作る事で強度を高め、直接の打撃力をアップさせたＩＳ。

そして羅刹の最大の特徴はその機動力。元のスラスターの性能は勿論の事、機体内でブーストのエネルギーを圧縮しスラスターに直接送る為の専用の機能を有している事から今までは放出、吸収、圧縮、再放出と言うプロセスを踏んでやっと使える瞬間加速（イグニッションブースト）を最初の二つのプロセスを飛ばして使える。更に羅刹には従来のスラスターの他に瞬間加速時のみ使用する専用のスラスターも搭載されている。このスラスターは圧縮したエネルギーをただ放出するのではなく、“後方に対する指向性を強めて”放出するため、同じ量のエネルギーでもその加速力は後者の方が上。この二つから羅刹の瞬間加速は発動までの早さ、その加速力が従来のＩＳを大きく上回り、その加速力を利用してパンチや直線的な蹴り（ライダーキック等）の威力を高められる。

一応、拡張領域（バススロット）を有してるから後付け装備（イコライザ）も使えなくは無いが、羅刹の性能を考えると基本は兵装を使わない格闘向けの機体となっている

単一仕様能力：『羅刹断撃』
発動時に機体内にシールドエネルギーとは真逆の性質を持った『反シールドエネルギー』を機体中にめぐらせ、腕や足の展開装甲を開いて手足に直接纏う事で相手のシールドバリアーを相殺し、相手に直接ダメージを与える能力。

しかし発動時にはシールドバリアー、正確には絶対防御を除くシールドエネルギーを使う全ての機能にエネルギーを送るエネルギーラインがカットされる。これは『反シールドエネルギー』より、自身のシールドエネルギーも相殺されてバリアーは働かない上に発動時は常時エネルギーが減少すると、白式や雪片の能力以上に使い勝手が悪くなるのを避ける為の措置である。

また、零落白夜がシールドのみならず、エネルギー質のもの全てを無力化できるのと違い、こちらはあくまでシールドエネルギーのみ。つまり零落白夜よりも持続力を高め、性能を低くした機能となっている

オリジナルＩＳ紹介（後書き）

単一仕様の欠点関して、何で絶対防御だけは大丈夫なのか？それに関する設定がどうしても思い浮かばない為ただ単に絶対防御のシステムやエネルギーラインはＩＳの中でも独立した構造になっていると考えてください（汗）

第１０章－決定、クラス代表（前書き）

ここ最近はＧＷ中の遠出の成果物（ＩＳ全巻）を堪能して更新出来てませんでした（汗）

第１０章ー決定、クラス代表

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏君で決定です。あ、一繋がりでいいですね！」

次の日の朝のＳＨＲ、山田先生の言ったこの一言は一夏を唖然とさせるのには十分な威力を持っていた。

「先生、質問です。なんで選抜戦に負けた俺がクラス代表になっているんですか？」

「それは「それは私が辞退したからですわ」

先生が一夏の質問に答えようとした時、先んじてセシリアがその質問に答えた

「確かに、選抜戦は私の勝ちでしたがしかしそれは考えてみれば当然の事。なにせ私セシリア・オルコットが相手だったのですからそれは仕方の無いことですわ」

相変わらず、自分に自信を持った物言い。しかし、前と違ってそこには男二人を下げずんだような様子は無く

「それで、私も大人気なく怒った事を反省いたしまして、真琴さんと一夏さんのお二人に代表の座を譲ることにしましたの。ＩＳの操縦は実戦が何よりの糧、クラス代表になれば実戦には事欠きませんもの」

一夏からしてみればあの時はセシリアとの決闘に勝ちたいとは思っ

ていたがクラス代表になりたいわけじゃなかった。なんというありがた迷惑だ、そう考えたところで一夏はふと一つの疑問を持った。

「あの、セシリアが俺と真琴のどちらかに譲ると言ったのにいきなり俺に決定なんですか？」

普通、この展開になれば俺か真琴で投票、もしくは試合をして決める筈。だと言うのに昨日の今日でいきなりのこの展開。すると今度は横の親友から

「それは、選抜戦でセシリアが代表になった段階で俺と一夏はクラスの代表候補から外れた。そして、セシリアが辞退したから俺がＳＨＲ前に先生の所に言って一夏を再推薦したって訳さ」

「いや、そこはせめて一言相談してくれよっ！何さりげなく抜け駆けしてんだ！？」

と、ツッコミを入れるといきなり真琴が不自然なぐらい真剣な表情で

「なぁ、一夏。折角のクラス対抗戦。どうせなら優勝したいだろ？」

「まぁ、そりゃぁやるからには勝ちたいが・・・」

「俺も一夏もＩＳの稼働時間はほぼ同じ。ならどちらがなるか決めるのは機体の性能次第だ。そして羅刹も白式もどちらも攻撃重視だが、羅刹の場合は純粋な特化じゃなく、高機動＋攻撃型なのに対し白式は完全に攻撃特化。しかも雪片は全ＩＳ中トップクラスの破壊力と来ている」

実際、千冬もＩＳの世界大会、モンド・グロッソで世界の頂点に立

てたのも雪片の火力と能力によるところが大きいと断言していた。つまり、白式と雪片弐型は使いこなせれば世界をも取れる機体と言える

「機体のポテンシャルも兵装の実績も白式の方が上、ならここはやはり一夏が代表になるべきだと譲ったわけさ」

なるほど、真琴の言う事も一理ある・・・あるが、どうも目の前で真顔で語る親友に違和感を感じたので

「して、その心は？」

「対抗戦とかはともかく委員長的な仕事なんてめんどいんで一夏に丸投げした」

すごい良い笑顔で即答されました。そりゃもう、怒りが沸くほどに

「よーっし、その喧嘩買ったっ！放課後、決着を着けようじゃないか！！」

「おっ！やるか？ガチな殴り合いなら負けないぜ」

一夏の言葉に真琴が不敵な笑みを浮かべ、ヒートアップしていく二人。しかし、思い出してほしい。今の時間はＳＨＲ中。つまり

「はしゃぐな、バカども」

鬼（千冬）の金棒（出席簿）が飛んでくるわけで二人して頭にタンコブを作って机に伏せる事になるわけである

「兎に角、クラスの代表は織斑一夏、依存はないな？」

当人が撃沈しているにも関わらず他の生徒に確認をとる千冬。結局、クラス一同賛成と言う事で一夏が目を覚ます頃には代表は満場一致で一夏に決定していたのだった

第１１章ー穏やかな日常は波乱の予感！？（前書き）

仕事の多忙と胃腸炎のコンボで投稿がほぼ丸一ヶ月も遅れてしまった・・・（汗）ここからどうにか巻き返していきます

第１１章－穏やかな日常は波乱の予感！？

「では、これよりＩＳの飛行操縦を実戦してもらう。三人ともＩＳを展開しろ」

クラス代表の話も落ち着いた４月の下旬、この時期になると教室内での座学だけでなく外に出ての“授業”行われる。訓練ではなく授業と言ってるのはこれは実際に全員がＩＳを着けて訓練するわけでなく先生や専用機持ちの生徒が実際にＩＳを動かしてるのを見て勉強すると言った内容だからだ。そしてこのクラスでも一夏、セシリア、真琴の三人がその役目を持っている。千冬の指示を受けてそれぞれがＩＳを展開しようとする。セシリアは軽く目を伏せるだけだが、一夏は右腕を突き出してガントレット、待機状態の白式を掴み、真琴は羅刹を着けた手を握り、その拳を自分の目の前に持ってきて目を伏せる等のポーズを取る。ＩＳの展開は意識を集中させる事で行われ二人にとってそれぞれのポーズは一番集中しやすいと言う訳だ。やがてセシリア、真琴、一夏の順番でＩＳが展開され軽くその場から僅か浮いた状態になる

「よし、飛べ」

直後、セシリアは高速で一気に宙に飛び二人と一夏もそれに続く。が、男二人の上昇速度はセシリアと比べると結構遅い

「何をやっている。スペック上の出力では二機の方が上なんだぞ」

漸くセシリアの近くまで上昇できた辺りで千冬先生からのお叱りの言葉。二人はＩＳの初心者だとかそういうのは鬼教官スキルで完全に度外視してるようだ。

「と言われてもな」

「自分の前方に角錐を展開するイメージ、つーのがイマイチ判らないんだよな・・」

「真琴さん、一夏さん。イメージは所詮イメージ、それよりも自分にあった方法を模索する方が建設的でしてよ」

二人して目を合わせ、真琴が頭を掻きながら口を開くとセシリアが高度を降ろして二人の近くにやってきてアドバイスをしてくれた。と言うのもあの選抜戦以降、セシリアの態度は大きく変化していた。尤も、自分に対し絶対的な自信を持ってる部分は相変わらずだが

「と言っても俺も一夏もそもそも空を飛ぶと言う感覚自体に慣れてないんだ。・・どういう原理で飛んでるんだこれ？」

自分にあった方法、ＩＳの飛行機能に関する原理から取っ掛かりを見つけられないかと、真琴がセシリアに話を振ってみるとセシリアは風になびく自身の髪を手で押さえながら

「説明しても構いませんが、長くなりますわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「・・・謹んでご遠慮します」

「そう、残念ですわ」

最早、単語のニュアンスからして確実に自分の脳の許容量をオーバーする。そう確信した真琴は若干、表情引きつらせながら辞退する

とセシリアは皮肉を嫌味もないホントに楽しそうな表情でそう返す。

「そういえばさ、二人とも何時の間にそんなになかよくなったんだ？」

いまでこそ、態度は大きく変わってはいるが真琴にとっては最初の頃のセシリアは一番接触を避けたいタイプの女性だった。だと言うのに選抜戦以降、二人はまるで普通の親友の様に話している。それが疑問に思った一夏は二人に尋ねてみると

「ん？まぁ、あれだ。物語でよくある夕暮れの海岸や河川敷で思いっきり殴りあった後、友情が芽生えるって言う」

それは男同士の話だろう・・・と何時もの用に真琴にツッコミを入れようとすると

「真琴さん、それは男の方同士の話ですわ」

「次は急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から１０センチだ」

セシリアに先を越された、ホントにこの二人何時の間に仲良くなったんだ？結局、疑問は氷解しなかったが、まぁ仲が良い事に越した事はないのでそれ以上の追求はやめるかと思った所で地上の千冬からの次の指示が来た

「あ、はいっ！しかし、あの時は戦闘中だったからよく判らなかったけど、つくづくＩＳのセンサーとはすごいな。かなり高いところに居るのに地上のみんなの姿がはっきりと見える」

「ＩＳは元々宇宙空間での活動を想定して造られたもの。何万キロと離れた自分の星の光で自分の位置を把握するのですからこれぐらいの距離は見えて当然ですわ。ちなみにこれでもかなり機能制限が掛かっているんでしてよ」

その言葉に一夏が返事を返しながら地上に目を向けると地表に居る千冬や箒を見ながら感嘆の声を上げるとセシリアが再びレクチャーをしてくれた。実際、一夏も真琴と一緒に何度かセシリアから教えを受けた事はある。と言うか今はほぼ放課後以外の時間を使いセシリアから受けている。と言うもの箒の教え方と言うのが

「ぐっ、とする感じだ」

「どんっ、と言う感覚だ」

「ずがーん、と言う具合だ」

等など、本人には悪いが全然判らなかったそうだ。ただ、自分の兵装が刀である分、箒との剣道の訓練は役に立っているのが救いらしい

「お前達、何時まで無駄話をしている。早く降りて来い」

と、そこで千冬の方から催促の声。これ以上モタモタしていたら出席簿が飛んできかねないので三人は話を切り、地表に目を向ける

「えっと、確か急降下は『背中の翼からロケットファイヤーが噴出す』イメージ、だったな」

セシリアが難なく急降下の動作も終えた頃に真琴も口に出して確認してから急降下を始める。こっちの方は機体に実際にウィングスラ

スターといった部品が付いてる分イメージがしやすい。真琴の方も上昇の時よりも速い速度で高度を落としていくが

「お、ととっ・・・あぶな～、ギリギリか・・・」

急停止の方はうまくいかず地表5センチの所で何とか停止した。もし、これを狙って出来たのであればすごい事ではあるのだが。兎に角、危うく地上に激突しそうになった事に気が抜けたように息を吐いた真琴、しかしその直後・・・・

「ちょっ！真琴、どいてくれ～～～っ！！」

「えっ・・・？」

ズドォォンッ！！！

まるで隕石が何かが降ってきた様な音がグラウンド中に響き渡ったがこれは別にホントに隕石が落ちてきた音ではない

「馬鹿者、誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

答えは一夏が停止する事が出来ずにそのままグラウンドに墜落した音だ。ご丁寧に真琴まで巻き込んで・・・

「すいません・・・」

「一夏、謝る前にまずどいてくれ・・・」

グラウンドに出来たクレーターの底に×の字になって折り重なって

る二人。二人ともＩＳを着ていた為特に怪我などはしてないが周りから聞こえる小さな笑い声に一夏の心のライフは既に０らしい・・・

「ふ～ん、ここがＩＳ学園」

真琴達が授業中の一方その頃、一人の少女がＩＳ学園の校門を見上げていた。学園の制服を身に着けて足元には荷物を入れたボストンバッグが置かれている。その心はこれから始まる学園生活・・と言うよりはこの学園に居る“彼”へとその想いが向けられている

「ここにあいつが居るのね」

そう呟き少女はボストンバッグを肩に担ぐとＩＳ学園の校門をくぐった。そしてこの少女の登場により彼らの学園生活はより一層波乱へと加速し、同時に彼の“受難”の始まりを告げる事になる

第１２章ー嵐を呼ぶ転校生はチャイニーズ幼なじみ！！（前書き）

今更ですが、この作品では一応、一夏も主人公扱いなので。物語は真琴視点と一夏視点メインでお送りします

第１２章－嵐を呼ぶ転校生はチャイニーズ幼なじみ！！

ＩＳにおける戦闘の強さは稼働時間に比例して長くなる。これは経験云々だけでなくＩＳの操縦者の特性をＩＳそのものが理解すると言う性質も理由となる。つまりは操縦技術の技術的成長が遅くとも、兎に角ＩＳを動かしていればそれだけ確実に強くはなれる事を表している。

（セシリアと戦ったときもそうだったけど、つくづくＩＳと格闘って相性悪いのな・・）

故に放課後の時間、真琴は決まってグラウンドでＩＳを動かしている、けれど理由はそれだけでない。今まではアニメや物語の中だけだった空中での格闘戦に慣れる為というのもある。

と言うのも格闘というのは空中より地上向けの戦闘技術だ。例えばローキックを例にしてみる。これはただ単純に足を横に振って相手を蹴る、と言うわけではない。その際に地面に付いてる方の足、すなわち軸足を９０度外に向けて捩れた足首の筋肉が元に戻る反動に勢いを乗せて蹴る、と言うのがローキックの正しい原理だ。この様に格闘術は体の一部や全体を軸にした回転運動を利用したり等、地に足を付けた状態を想定した部分がある。その為、空中戦が多いＩＳでの戦いにおいては軸や踏ん張りが不安定になり格闘戦はその真価を発揮するのが難しい。

宙に浮いた状態で、ひたすら正拳付きや蹴りと言った基礎動作を反復している真琴。そしてそれが終ったかと思うと今度は今度は目を閉じて意識を集中させた。すると開かれた手の平から光が溢れ、ゆっくりと形を成していく。光が収まる頃にはそこには一丁のショッ

トガン、そして更にもう片方の手に意識を向けるとそちらの方にはマシンガンが握られている。どちらも一般的な量産型の兵装だ

（セシリアや一夏と比べるとまだまだ遅いな・・・同時展開なんてまだ出来ないし）

この兵装は千冬が真琴に渡した後付け装備だ。羅刹は格闘仕様のＩＳだが、他のＩＳ同様に拡張領域を有している為、一応後付け装備も使う事は出来る。真琴本人としては必要無いと思っているが、機体の性能はフルに活かせ、使えるものは全て使えと千冬はそれを一蹴。格闘戦からの銃撃戦への切り替えで近距離での使用を想定したショットガンと遠距離での戦闘のためのマシンガンを羅刹に無理やり装備させた訳だ。それなら白式も同じでは？と思うだろうが白式の場合は雪片弐型が拡張領域も全て使ってやっと装備できる兵装な為、他の兵装は使うに使えないのだ。とは言っても、真琴も一夏も射撃技術に関しては素人。大気の状態や反動制御、弾道予測等その他諸々の要素を一瞬で考慮するだけの技術はほぼ皆無。千冬もそこは判っている為、真琴の場合も無いよりはマシ・・と言う程度にしか考えていない

（代表戦が終ったら、セシリアにでも教えてもらうか・・）

せめて動く相手に狙いをつけて撃てる程度にはならないと。そう思いながら二丁の銃をしまい、今日は少し早めに訓練を切り上げた。何時もならもう少し訓練を続けるところだが、今日はこの後クラスメートに寮の食堂に来る様言われている。かと言って訓練帰りにまっすぐ直行、と言うわけにもいかない。要は自室でシャワーを浴びて汗を流す必要があるのだ

これで男が多いならばそんなに神経質にならなくてもいいだろうが

ここは残念ながら殆どが女子。そういう事に何時も以上に気を使わないといけないわけで、つくづく女だらけの場所に身を置く事が男にとっては疲れる事か実感させられる。今となっては、最早慣れる以外に手段はないのだが・・・

「と言うわけでっ！織斑君クラス代表決定おめでとうっ！！」

幹事的な役割をしていると思われる生徒が声高らかに言った直後、自分に向かって降り注ぐクラッカーのテープの雨。それがより重く感じたのは恐らく自分の心の重さも表しているに違いないと考えつつ一夏は辺りを見渡す。まず自分の座席の上には『織斑一夏クラス代表就任パーティ』と書かれた大きな紙。そして自分の隣や近くには箒や真琴、セシリアが陣取っている。そして周りには飲めや歌えや（別に歌ってる人は居ない）と大盛り上がりしているクラスメート達、と言うより明らかに他のクラス連中も居るのではと思えるぐらい人が多い。

「いやぁ、セシリアも判ってるよね～」

「そうだよねー、折角クラスで二人だけの男子なんだし、持ち上げないとね」

「私達は貴重な経験が積める、他のクラスには情報が売れる。一粒で二度おいしいよね」

おいこら、勝手にクラスメートを売るな・・・

「人気者だな、一夏・・」

「ホントにそう思うか・・？」

「ふん・・」

どうしたものかと小さくため息を吐くと箒が話しかけてきた。心なしか不機嫌そうなのは・・いや、明らかに不機嫌なのは何故だろう・・？理由こそ判らないが、とりあえずこう言う時の箒にはあまり余計な事は言わずに適当な所で話を切り上げる方がいい。伊達に長年幼なじみをやってる訳じゃない、そこら辺の事は心得ている。一夏は箒がそっぽを向いてお茶を飲み始めた所で自分もジュースに口を付けようとした時

「はいはーい、新聞部でーす！話題の新入生二人にインタビューをしに来ました～。あっ、私は2年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はい、これ名刺」

突然、他の生徒を書き分け一人の女子生徒が近づいてくると自分と真琴に名刺を差し出す

「それじゃあ、まずは天乃宮真琴君。初めてのＩＳでの実戦はどうだった？やっぱ緊張した？」

そしてボイスレコーダーの電源を入れてマイク部分を真琴に近づけた。真琴は「ん～」と暫く考えてから口を開くと

「まぁ、何時かの入学試験と違ってガチな実戦だったしそれなりに緊張はしました。負けはしましたけど、色々と得るものはあったか

な・・・と、こんな感じでいいのか？」

俺に振るなよ。確認する様にこちらに目を向けてくる真琴に軽く首を振りながら返すと、薫子はボイスレコーダーを一旦切ると

「う～ん、とても平凡なコメントだね。まぁ、いいか、後で適当に捏造しておくからいいとして」

「いや、記者が堂々と捏造宣言するのはどうかと・・・」

「それじゃあ、次！！織斑君、ずばりクラス代表になった感想をどうぞ！」

真琴のツッコミも完全に、そして華麗にスルーして今度は俺に向かってボイスレコーダーを向けてくる。俺としてはあまりの乗り気じゃないんだけど・・でも、決まったものはどうしようもないので

「まぁ、なんと言うか頑張ります」

「ええ～、もっといいコメント頂戴よ～！俺にさわるとヤケドするぜ、とか」

真琴の時は直ぐに引き下がったと言うのに、やはりクラス代表だからか俺の時は少し食い下がってくる。気の利いたコメントか・・・ならば

「自分・・不器用ですから」

「うわ、前時代的～」

確かに古いが、日本の誇る名優の一言。何が不満だというのか？

「まぁ、いいか。こっちも適当に捏造しとくとして」

この先輩は捏造する事しか考えてないのか？この人の書く新聞は捏造と独断に溢れているに違いない。一夏と真琴の考えが期せずしてシンクロした時

「ああ、セシリアちゃんもコメント頂戴」

あの時、代表選抜戦を勝利したのはセシリア、だというのに彼女は代表の座を辞退した。その理由が気になったのか薫子はセシリアにもボイスレコーダーを向ける。するとセシリアは持っていたコップをテーブルの上に置くとその場に立って

「私、こういったコメントはあまり好きでありませんが、仕方ありませんわね。コホン、ではまず、どうして私がクラス代表を辞退したかというと、それはつまり―」

「ああ、長くなりそうだからいいや。写真だけ頂戴」

等と言ってボイスレコーダーをしまい、首にぶら下げていたカメラを手に持った。捏造は平気でするわ、長いコメントはノーサンキューだったり、それでいいのか新聞記者・・・

「なっ！？最後まで聞きなさいっ！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。そうだね～」

そう言って、俺たち４人をざっと見渡した後、納得した様に頷いて

「よし、それじゃ適当に天乃宮君に惚れたからって事にしておこう」

「なっ！？」

薫子のこの一言にセシリアは一気に顔を赤くし何か言いたげに口をパクパクさせている。するとその横から真琴は苦笑を浮かべつつため息を吐くと

「センパイ、幾ら捏造するにしてもそれは現実味無さ過ぎです。何がどうなってそんな馬鹿げた展開に」

「え～、そうかなぁ？」

「そうですわ！」

そこで漸くセシリアが声を上げた。が、その視線は真琴の方に向いており

「何を持ってバカとおっしゃるのかしら！？」

「えっ、何故そこでセシリアが俺にキレる？」

「大体、貴方は「はいは～い、最後に写真取るから三人とも並んで並んで」

まだ、何か言いそうだったセシリアの腕を薫子が握って強引真琴の隣に並ばせ、同じ様に一夏をその隣に並ばせると、三人から少し距離をとってカメラのレンズを覗き

「それじゃあ、撮るよー。１２４÷２＋８０×４÷２０－６２は？」

「なんですか？その長い数式・・」

「答えは１８～」

無駄に長い上に答えが２ですらない・・・そんな一夏の疑問をよそに切られるシャッター。そしてその瞬間、クラスメイト全員が滑り込みで写ってきて、結局クラスの集合写真となった

それから、千冬の喝が入るまで就任パーティは続き、何時もより寝るのが遅くなった次の日。朝のＳＨＲ前の時間。真琴が眠たそうに大きな欠伸をかいていると

「天乃宮君。おはよー。ねえ転校生の噂聞いた？」

クラスメートが真琴に話しかけていた。入学式から数週間、俺も真琴も女子ともある程度普通に話せるようになっていた。特に真琴の方は選抜戦以降、自分から話しかける事は少ないのは相変わらずだが、それでも話しかけてきた相手とは普通に接している。幾ら周りが女子だらけでも、クラスで孤立するのはゴメンだしそういう意味では俺も真琴もここでの生活が軌道に乗ってきたと言えるだろう（ＩＳの授業に関してはまだまだだが）

「転入生？この時期にか？」

真琴がわざわざ疑問の声をあげるのも無理は無い。この学園の転入はとても条件が厳しいとされる。と言うのも試験だけでなく国そのものからの推薦が必要とされている。そして今はまだ４月、転入するぐらいなら普通に入学した方がまだ簡単だ

「そう、何でも中国の代表候補生らしいよ」

「あら？私の存在を危ぶんでの転入かしら」

「別に同じクラスになるわけではないのだろう？騒ぐ事でもあるまい」

流石女子、反応こそ違うがこの手の噂話には敏感なのは同じらしく、周りのクラスメートも雑談をやめてこちらに視線を向けて自分の席に居た筈の箒とセシリアは何時の間にかこちらに来ていた。しかし、転入生か・・

「どんな奴なんだろうな？」

「気になるのか？」

「気になりますの？」

「ん？ああ、少しは」

聞かれた事に素直に返事をしただけだと言うのに、二人の表情は不機嫌そう、というより少し険しくなって

「今のお前に女子の事なんか気にしている余裕はあるのか？来月はクラス対抗戦があると言うのに」

「そうですわ！クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。お相手なら私や真琴さんで勤めさせていただきますわ。何せ専用機を持っているのはまだクラスで私達三人だけなのですから」

「俺も訓練に参加するのは決定事項か。いや、まぁ構わないけどな」

こちらも経験は積んでおきたいし。その言葉で締めて真琴は手の平と拳を打ち合わせた。言葉の割りにはノリノリだな、真琴。まぁ確かに通常の訓練機は授業以外で使う場合は使用申請だの、整備だの手続きだけで丸一日は掛かる。時間が惜しい俺にとっては専用機持ちが訓練相手と言うのは時間的にも経験的にもありがたいのだろう

「まぁ、やれるだけやってみますか」

「やれるだけ、では困りますわ。一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ、男がその様な弱気でどうする？」

「そうだよ、織斑君が優勝したら皆が幸せだよー」

因みに一番最後のクラスメートが言った言葉の意味は各クラスにやる気を出させる為、クラス対抗戦の優勝者・・と言うより優勝クラスに用意された賞品、食後のデザートフリーパス六ヵ月分の事だ。俺も真琴も極めて甘党と言うわけではないので賞品の効果は薄いが、他の女子達には効果は絶大のようだ

「今の所、専用機を持ってる代表って1組と4組だけだから余裕だよ」

それからは他のクラスメートも周りに集まってきて口々に激励の言葉を口にしていった

「その情報、古いよ」

そんな喧騒を切り裂くように響いた声、俺と真琴にとってはあまりに聞き覚えのある声に互いに目を合わせた後、教室のドアに目を向けると

「2組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

教室のドアに背を預け、腕を組んだ姿勢で不敵な笑みを浮かべつつこちらに目を向けている少女の姿

「もしかして・・・」

「鈴・・？お前、鈴か！？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

それは中学の時に別れた、俺と真琴の幼なじみの少女だった

第13章ー対面、ファースト幼なじみとセカンド幼なじみ

何時もの風景、何時もの授業時間、全員が素直に千冬の講義に耳を傾ける中、二人だけ話が耳に入っていない人物が居た。と言っても今回は一夏と真琴ではない。

「……」

その二人の人物はずばり箒とセシリア。箒は不機嫌な表情のままボールペンのペン先でトントンと机を叩いており、セシリアはノートにペンを走らせてはいるが書いてある事は意味不明、と言うより文字にすらなっていない。

（なんなんだ（ですの）、あの女（人）は！？）

やがてそんな事を思うと同時に、二人してペンを素手でへし折った

時は少し遡り、突然クラスに押しかけて宣戦布告をしてきた鈴。丁度、今話題に上っていた転校生の登場にクラスがざわめく。鈴にとっては上々の反応にフッ、と目を細め得意げな笑みを浮かべた。

そんな中

「くっ……」

「プッ……」

突然、吹き出した真琴と一夏

「なに格好つけてんだ？すげえ似合わないぞ」

「無理に大人ぶっても似合わないし、慣れないことはやめとけ。違和感バリバリだぜ」

「なっ……！？　なんて事言うのよ、あんたら！」

さっきまでの気取った態度から一変。噛み付く様に声を荒げる鈴。その直後、鈴の頭に軽い拳骨が落ちた

「った～～～、何すんの！？」

怒り心頭な表情で鈴が拳骨を放った張本人の方を向くが直ぐにその表情が引きつった。そこに居たのは

「もうＳＨＲの時間だ。自分のクラスに戻れ」

「チ、チフユサン……」

鬼教官こと織斑千冬。自分の弟ですら学園では先生と呼ばせているのだ。当然、それは他のクラスの生徒でも同じなわけで、すぐさま鈴にもお馴染みの出席簿の一撃が入り

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

さっきまでの勢いはどこへやら、頭を抑えながらも素直にその場をどける鈴。そして、最後に一夏と真琴の方に視線を戻し

「後でまた来るからね。逃げるんじゃないわよ！」

そういい残してそのまま自分のクラスへと戻っていった

（さっきの女子はなんなのだ！？　ずいぶんと親しそうに見えたが）

いや、実際親しい仲なのだろう。しかもあの女子と会った時の一夏の反応、自分と会った時とまるで似ていた。そう、昔に別れた幼なじみと会った時の様に……

（ふざけるな。一夏の幼なじみは私だろう！）

考えれば考えるほどにイライラしてくる。が、ふとある事に思い当たる

（いや、待てよ？　冷静に考えたところで大した事ではない）

仮にあの女も幼なじみだったとしてもそれは自分も同じ事。そして何より

（自分は一夏と同室。部屋に戻れば二人っきり）

そう、これは誰も負けないアドバンテージ、そしてそれは鈴だけにとどまった事ではなく他のクラスメートに対しても言える事だ。加えてクラスの中でも一番強敵となりえそうだったセシリアは真琴の方に惹かれているから元からライバルにはなりえない。自分が断然優位なのは変わらない。そう考えると一気に思考が冷静さを取り戻す。そうだ、さほど気にする必要も無い。さて、授業に集中し直すかと思ったが……少し遅かった

「篠ノ之、答えは？」

「はいっ！？」

いきなり、名前を呼ばれ不意に素っ頓狂な声をあげてしまった。答えは？といわれてもさっきまで一夏の事で頭が一杯だった為、答え処か問題すら判らない

「き、聞いていませんでした……」

故に、そう答えるしかなく。箒は学園生活が始まって以来、初めて千冬の出席簿の一撃を喰らうハメになった

（何なんですの！？　あの人は）

男の人を好きなるのは初めで勝手が判らない上に真琴の方もこちらの気持ちに気づく気配は今のところ０。一夏もそうだが二人とも乙女心に鈍いのだろう。類は友を呼ぶとはよく言ったものだ。それでもセシリアは焦る事は無かった、自分は専用機持ち。ＩＳ初心者

の真琴に訓練をつけると言う理由付け（理由付けと言っても、きちんと訓練はつける）で簡単に二人っきりになれるし、彼の助けにもなれる。これはセシリアにとっては大きなリードポイントとなっていた。自分以外に真琴と親しそうにしている箒だって一夏の方に惚れているからとりあえず主だったライバルも居ない。中々思う様に行かずじれったさは感じるが特に焦る必要は無いとふんでいた……が

（親しい知り合いな上に候補生で、しかも専用機持ち！？）

だと言うのに、いきなりクラスに殴りこんできたあの中国の代表候補生。こちらの手札を全て押さえこんできた。加えて、この間までの真琴は女子との接触を極力避けていた筈。だと言うのにあれだけ親しそうに話していた。昔からかなり仲の良い相柄だと言うのは簡単に予測できる。条件は同じな上にスタート地点は自分の方が後ろ、圧倒的に不利だ

（ズルですわ、イカサマですわっ！）

わしゃわしゃと頭を両手で髪を掻き乱すセシリア。

（ＩＳの特訓だけでは足りませんわ）

しかし、だからと言ってそうやすやすと負けるつもりは無い。それならそれで何とか別の事でイニシアチブを得るしかない

「オルコット」

「例えばデートに誘うとか、いえもっと効果的な……」

授業はまとも聞いていない。しかも

「いっそ夜這いでも……」

思考がおかしな方向に向いてる上にトンでもない単語が飛び出したところで千冬はため息と共に箒の時よりも強い力で出席簿を振り下ろした。尤も、セシリアの場合はこれは激しい勘違いで完全な叩かれ損でしかないのだが……

「びっくりしたぜ。お前が二組の転校生だなんて。連絡くれりゃよかったのに」

そして、その日の昼休み。食堂の入り口で腕を組んで仁王立ちで待っていた鈴と合流し食堂カウンターで注文を取っていた

「そんな事したら劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ」

「まぁ、確かに驚きはしたがな」

「でしょ？」

そこまで話した所で鈴の前のカウンターに醤油ラーメンが置かれ、鈴がそれを受け取った

「相変わらずラーメン好きなんだな。約1年ぶりってとこだな。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。一夏もたまには怪我病気しなさいよ」

「いや、その希望はちょっとおかしくね？」

最後にカレーを受け取った真琴がそう言うと、三人はそのまま空いたテーブルを探す。そしてその様子を一挙一動見逃すまいと鋭い目線を向けるセシリアと箒。そしてそれは三人が席に着いた時も変わらず、その隣の席を陣取り、食事にも手を着けずに三人の様子を注視していた

「そういえばさぁ」

ラーメンを一口啜った所で、鈴が真琴の方を向いて口を開いた

「あんた、少し雰囲気変わった？」

「ん？　別にイメチェンした記憶は全然ないが？」

「いや、鈴が言いたいのは見た目じゃなくて態度の方じゃないか？」

「一夏の言う通りよ。そうね、少しオープンな性格になったって言うか」

一夏と鈴の言葉を聞いて真琴もあ～っと納得する。鈴とは確かに中学の時からの付き合いで当時一番仲がよかった女の子とは言えた。が、そんな鈴が相手でも当時の自分は何処か壁を一枚作った付き合いをしてたっけ？と思い出しながら水を口に付けた

「まっ、この学園に来て色々あったのさ。それにどっちかと言うとこっちが俺の地みたいなもんだしな」

「色々ね～。まぁ、でも今の真琴の方がつるみやすいし、いいかもね」

「だろ？」

その直後、食器が揺れるほど力強く二組の手がテーブルに叩きつけられた

「一夏、そろそろ説明してもらいたいのだが？」

「そうですわ。まさか真琴さん、こちらの方と、つ、つつ、付き合っていらっしゃるとか？」

「別にそんなんじゃないさ。中学時代の友達なだけだ」

「そうだぜ、単なる幼なじみさ……どうかしたか？」

「なんでもないわよ」

一夏と真琴が何でも無いように答えた直後、鈴が険しい視線を一夏に向けた。それに気づいた一夏は鈴に尋ねるも鈴は不機嫌そうにそっぽを向くだけだった

「幼なじみ……？」

自分と同じ。だが、自分はこの少女とは面識が無い？そう呟きながら箒が一夏に先を促すと

「そうか。お前とは丁度入れ違いで転校してきたんだっけな。篠ノ

之箒、前に話しただろ。箒はファースト幼なじみでお前はセカンド幼なじみってとこだ」

「ふ～ん……」

一夏から紹介を受けて、鈴は少し挑発的な目線を箒向けた。やがて、箒も同じ様な目線を返し

「初めまして、よろしくね」

「ああ、こちらこそ」

お互い、表情こそ怒っていないが何処か二人の目線の間に火花が散っているようにも見える。そしてその空気を壊すように咳払いが一つ聞こえ

「私の存在を忘れてもらっては困りますわ。私はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ。先日、真琴さんとは代表をかけて争った――」

「あんた、一組の代表になったんだって？」

「ああ、なりゆきでな」

セシリアの言葉は完全にスルーして一夏に話しかける鈴

「良かったら、あたしが練習みてあげよっか？ＩＳの」

「って、聞いていますの！？」

それに気づくと再びテーブルに手を叩きつけたセシリア。流石にこれはスルーするにもいかないので一旦話を切り、適当にあしらおうとしたがそこでふと

（そういえば……）

箒の方は兎も角としてなんでセシリアまで自分に食って掛かるのだろう？しかも、話を聞く限りは一夏じゃなくて真琴の事で……もしかして

「ちょっと、いい？」

「な、なんですの？」

鈴はセシリアを軽く手招きして彼女の耳元に口を近づけると、そのまま小声で

「あんたさぁ、あたしが真琴に惚れてるとでも思ってる？」

「ち、違いますの！？」

ああ、やっぱりか。恋は盲目、とは少し違うかもしれないがどうやらセシリアはとんでもない勘違いをしているらしい。

「全然違うわよ。真琴とは単なる仲の良い友達でしかないもの」

「そう、なんですの？」

その一言でキョトンとなるセシリア

「そうよ。あたしはどちらかって言うと……」

そこで言葉を切ってある方向に視線を向けた。セシリアもそれを追って目を向けると、やがてなるほど、と納得する。そこに居たのは箒に彼女の事を問い詰められている一夏の姿

（どうやら、わたくしではなくて箒さんのライバルでしたのね……）

セシリアは安堵したかの様に胸を撫で下ろすと鈴は判ってくれた？と軽く首をかしげながら言うと

「と言うわけだから、私はあんたの邪魔はしないから。そっちも」

「判っていますわ。恋は当人同士のモノ、そちら邪魔はしませんし勿論、箒さんの味方もしませんからご安心を」

「話が早くて助かるわ。まぁ、とりあえず改めてよろしくってことで、セシリア」

「ええ、よろしくお願いしますわ。鈴さん」

なんと言う変わり身の早さ。さっきまでいがみ合っていた感があったのに二人で内緒話をした瞬間この変わり様、女の仲と言うのは良く判らん。そんな事を思いながら真琴は二人の様子を見ながら最後に残っていたカレーを一気にかきこんだ

「でも、以外でしたわね。こんなにも早く訓練機の使用許可が下りるなんて」

そして、その放課後。今日も何時もの様にＩＳの基本動作を教えてもらうべく真琴と一夏はセシリアと一緒にアリーナに来ていた。しかし何時もと違い、今日はアリーナに箒も来ていた。学園の訓練用ＩＳ、打金を装備した状態で

「近接戦闘の訓練が足りていないのだろう？　ならば、私の出番だ」

そう言って箒は早速、腰の鞘から剣を抜く様なモーションで打金に装備された近接ブレードを展開させる。

「早速、始めるぞ。一夏、刀を抜け」

「お待ち下さい。箒さん、確かにわたくしでは近接戦闘の訓練が不足するのは事実ですが、まずはＩＳの戦闘の基礎的な部分をある程度固めませんと」

「だが、クラス代表戦まで時間が無いのも事実だ。ならばここは一夏には一刻も早く、雪片の扱いになれて貰わなければならない」

どちらも言う事もご尤もだ。基礎がＩＳにのみならず全てにおいて大事なのは当たり前の事だし、俺の場合は武器が雪片しか無いのだから雪片をよりうまく扱えるようになるのも大事……

「だったらさ……」

二人が訓練内容について議論している所に真琴が手を挙げて意見を告げた

「一応基礎的な動作は出来る様になってきたし、ここはいっその事二人と一夏で実戦訓練をしてみればどうだ？１対２の戦闘に慣れればタイマンならかなり楽になるだろうし」

鬼の様な第三の意見を……

「お、お前ら…俺を殺す気か……」

「ふん、普段から鍛えていないからそうなるのだ」

結局、あの後真琴の案が採用され俺はセシリアと箒の二人係りで散々ボコられた。はっきり言って今日はもう動きたくない。早めにシャワーを…って

「箒、セシリアと一緒に向こうのピットに行ったんじゃなかったのか？」

ＩＳ学園には当然ながら男子更衣室は無い。その為、俺と真琴は人が居ない時間帯はピットで直接着替えている。

「セシリアならまだアリーナに残って真琴と訓練をしている。それに私が何処に行こうと私の勝手だろう。それより、一夏は無駄な動きが多すぎる…だからそんなに疲れるんだ。もっと自然体に動けるようになれ」

「そうですね…」

こちらは激しい訓練（と言う名のイジメ）を受けてクタクタだというのにねぎらい一つ無い容赦のなさ。この幼なじみの優しさに涙が出そうになる…

「ところで、箒。シャワーなんだが今日は俺が先に使っていいか？もう、汗だくで――」

「一夏！　お疲れ様。はい、これ差し入れ、タオルと飲み物」

箒との交渉中。突然部屋のドアが開き、そこにはどっかの運動部のマネージャーの様にタオルとスポーツドリンクの入ったボトルを持ってる鈴の姿があった

「ドリンクはぬるめでよかったんだよね？」

「サンキュー……ああ、生き返る」

鈴からタオルとドリンクを受け取り、汗を拭きながらボトルのストローに口を付ける。同じスポーツドリンクでもやっぱり運動したあとの方が断然おいしく感じる

「それにしても変わってないね一夏。若いくせに身体の事ばっかり気にしているところ」

そう、激しい運動で熱を持った身体にキンキンに冷えたドリンクを流し込むのは気分はスカッとするが実際は身体にダメージを与えてしまう。本当ならこうしたぬるめのドリンクが最適なのだ

「若いうちから不摂生しているとくせになるんだぞ。それで後に泣くのは自分と自分の家族だ」

「じじくさいよ……」

そう言った後にドリンクを横に置くと自分の隣に鈴が腰を下ろした。何処か優しげな瞳に一瞬、ドキっとしたのは、内緒にしとこう

「一夏さぁ、私が居なくなってやっぱさみしかった？」

「そりゃ、遊び相手が居なくなるのは大なり小なりさびしいもんだろ」

「そういう意味じゃなくて……ほら、久しぶりに会ったんだし他に言う事が――」

「あー、ゴホン」

直後、鈴の言葉を遮るように聞こえた咳払い。二人がそっちの方を向くと、其処にはジャージの上を羽織った箒の姿

「一夏、私は先に戻らせてもらう。それとシャワーの件だが先に使っていいぞ。では、また後でな」

そう言って、何処か不機嫌そうに箒はピットを後にした

「一夏……」

「ん？」

すると、横からさっきまでの嬉しそうな表情とは一変、怪訝そうな表情の鈴

「シャワーの件ってどういう事？それにまた後でって」

「ああ、俺と真琴って特殊入学だったから部屋の都合がついてなくてさ。俺は今、箒と同室なんだ」

「そ、それってあの子と寝食を共にしてるってわけ！？」

すると突然鈴が顔を近づけてすごい勢いで問いただして来た

「あ、ああ。でも、相手が幼なじみの箒で良かったよ。これで知らない女の子とじゃ緊張して夜も眠れないからな」

その勢いに若干、気圧されながら答えると鈴は顔を離し、少し俯き始めた。やがて

「――――いわけね」

「はい？」

「だからっ！　幼なじみだったら良い訳ね！？」

そう叫ぶとそのまま鈴もピットから出て行ってしまった。一体、

なんなんだ？

「と、言うわけだから私と部屋を代わって頂戴！」

その夜、シャワーも終わり後はお互い寝るだけ。その前にお茶の一杯でも飲もうという事になり一夏がお茶を入れている時に部屋にやって来た鈴の一言がこれだった

第１４章－千冬の弟

「と言う訳で今日からあたしがここで暮らすから部屋変わって」

「ふざけるなっ！　何故、私がその様な事をしなければならない？」

今日の夕暮れ、私物を入れたボストンバッグを肩に下げて部屋にやって来た鈴。そしてやって来るなりこの一言。そして、どういうわけか箒もがんとして譲ら無い。俺はと言うと巻き込まれまいと二人から距離を離しお茶を淹れている

「いや～篠ノ之さんも男ど同室なんて嫌でしょ？その点あたしは大丈夫だから」

「別に、嫌とは思ってない！　仮にそうだとしてもこれは私と一夏の問題だ。部外者は口出しするな！」

「大丈夫、あたしも幼なじみだから」

「それは口を挟む理由にならない！」

お互いどちらも譲らず平行線な会話が続く。やがて、箒じゃ話にならんと踏んだのか話の矛先を俺に向けてきた

「ねぇ、一夏もあたしと一緒の方がいいよね？」

「ふざけるな！　自分の部屋に戻れ！」

言葉だけじゃ埒が明かない。箒は威嚇とばかりに壁に立てかけて

あった竹刀を手に取る。が、鈴は既に箒の事は眼中から無く
「と、ところでさ一夏……約束、覚えてる」
さっきまでとは違う話を振ってきた。が、この態度で箒はいよいよ頭に来て
「無視するなっ！　ええいっ、こうなったら力づくで！」
「あっ、バカ！　箒――」
これは痛いじゃ済まない。流石の一夏も止めに入ろうとしたが、それよりも早く鈴はＩＳを腕部のみに展開し、箒の竹刀を受け止めた
「大丈夫か！？　鈴」
「大丈夫に決まってるんじゃん。今のあたしは代表候補生なんだから」
と、一夏に向けて軽くウィンクをして見せるとそれとは逆に少し険しい表情を箒にむけて
「と言うか、今の生身の人間だったら本気で危なかったよ」
「う……」
「まっ、いいけどね」
箒も自分の失態に気づき竹刀の切っ先を下げて黙り込んでしまった。
さっきまでとは違い、気まずい雰囲気がその場に流れている

「そ、そういえば約束がどうとか言ってたよな？」
「あ、うん。えっと……覚えてる、よね？」
そう言われて一夏は数秒ほど考えてから
「あ、あれか？　鈴の料理の腕上がったら毎日――」
「そう、それ！」
「酢豚をおごってくれるって奴か？」
「……はい？」
今の一夏の一言で唖然となる鈴。そしてそんな鈴に気づく様子も無く
「だから、鈴が料理出来る様になったら飯をご馳走してくれるって約束だろ？」
そしてその後ろで箒も完璧に呆れたような表情でため息をついている。鈴と一夏が交わしたその約束に関しては無関係な自分でもその約束が何を意味するかは判った。だと言うのに一番の当事者のこの男だけは判っていない
「それにしても、俺の記憶力も中々――」
「最っ低っ！！」
と、自分の記憶力を自画自賛する一夏の言葉は鈴の平手打ちで止

められた

「女の子との約束もちゃんと覚えてない奴なんて男の風上にも置けない奴！　犬に噛まれて死ねっ！！」

「なんで怒ってんだよっ！？　ちゃんと覚えていただろ？」

ニュアンス的はこれであってる筈だ。何が間違ってるというんだ？

「約束の意味が違うのよ！　意味が！」

「だったら説明してくれよ。どんな意味があるんだ？」

「せ、説明って……説明できるわけ無いじゃない」

そう、この約束の意味を一から説明するなんて恥ずかしすぎて出来ない。日本の言うところの味噌汁。つまりは、料理がうまくなったら一夏のお嫁さんにしてね、なんて恥ずかしいにも程がある。が、目の前の幼なじみは本気で納得がいっていないらしい

「だっだら、こうしましょ。次のクラス対抗戦、勝った方が一つだけ何でも言う事を聞かせられるって事で」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな」

それから二人は暫く、にらみ合ってたがやがて鈴が一夏に背を向けて

「兎に角、覚悟しなさいよっ！」

そう、言い残し部屋を去っていった

「一夏……」

そして後ろから聞こえた自分を呼ぶ声に振り返ると其処には物凄く冷たい目で自分を見ている箒の姿。箒は数秒ほど何も言わずに居たがやがて

「馬に蹴られて死ね！」

さっきの鈴の言葉を正しく訂正してから、ベットにもぐりこんでしまった……一体何なんだ？

「まぁ、人は多いっていってもただの学年行事だ。無論やるからには勝ってもらうが気楽に行け、という訳にも行かんか……なんせ初戦から鈴が相手だもんな。それにしても――」

遂に迎えた試合当日。鈴との約束がある為鈴と当たるまでは負ける訳には行かなかったがそれは杞憂に終った。そう、なんの因果か初戦の相手はなんと鈴だった。でもまぁ鈴と当たる前に脱落するって心配が無くなったのはありがたかったな。それよりも――

「うわぁ、満員御礼だな……」

ピットルームのディスプレイに映る試合会場。その客席は一分の空席も無い見事な満席となっていた

「それだけ注目されているのですわ。因みに観客席に入りきらなかった生徒達は校舎内のモニターで観戦するんだとか」

「何気にプレッシャーかけるなよ……」

おいおい、会場に居る分だけじゃないのかよ。たかだか学園行事の大会だってのに何でそんなに人が集まるのか。と、セシリアに言われて今更になって緊張してきたが

「情けないぞ一夏っ！　何を怖気づいている。胸を張って堂々と行け！！」

「そうですわ。特訓の成果を披露して下さいませ」

二人に叱咤と激励を受け、一夏は白式を展開しカタパルトに立つ。すると山田先生から通信が入った

「あちらのＩＳは甲龍（シェンロン）。白式と同じ近接格闘型のＩＳです」

同時に、何時かセシリアと戦ったとき同様に目の前に甲龍に関する情報が提示される

『それでは両者。規定の位置まで移動してください』

会場に流れる試合開始直前を告げるアナウンスの声。カタパルトの発進口が開き、カタパルトが起動。一夏も発進体制に入る

「一夏っ！」

呼ばれた声に振り返ると其処にいた箒、セシリア、真琴が

「勝てっ！」

「頑張ってくださいっ！」

「気合負けだけはすんなよ」

「……おうっ！」

最後に力強く頷き、一夏は試合会場へと飛び立ち、いよいよ、一夏対鈴の試合が始まろうとしていた

一夏がアリーナに入場してくる頃には既に鈴が待ち構えており、一夏の姿を確認するとさながら強者の余裕をはらんだ不敵な笑みを浮かべながら最後通告をしてくる

「いま謝るなら痛めつけるレベルを下げてあげてもいいわよ」

どの道、痛めつけるのは確定事項かよ

「そんなのいらねえよ。全力で来い」

「言ったわね、なら微塵の容赦も無い。この甲龍で叩きのめしてあげるっ！」

そう言って鈴は背中に背負っていた。柄の部分を短く詰めた大型の

青龍刀『双天牙月』を構える

「それでは、両者試合を開始して下さい」

試合開始のブザーと同時に先制を取ったのは鈴。一夏との距離を詰め、青龍刀を振り下ろし一夏もそれを雪片で受け止める

「ふぅん。初撃を受けきるなんて。やるじゃない……」

「それはどうも……」

「そう言えば――」

僅かな鍔迫り合いの後、一度距離を置く両者。鈴はてっきり二撃目を放つかと思ったが構えたまま口を開いた

「あんたとセシリアの試合のビデオを見たわよ。確かに雪片のバリアー無効化攻撃は強大だわ。でもね、白式でなくても火力に優れたＩＳならバリアーを突破して本体にダメージを与えられるの」

言いながら、鈴はもう片方の手にも同じ武器を持つ。『双天牙月』の名の通り、どうやら元々二本で一セットの武器のようだ

「勿論、この甲龍もね。つまり――」

再び一夏との距離を詰める

「条件は互角って事よっ！」

一刀流と二刀流では余程使い手の実力差が無い限りは後者の方が

断然有利、ましては今回に至っては二刀流の方が実力もある。当然の様に、鈴のラッシュに一夏は防戦一方になる。その途中、鈴は更に二本の武器を柄の部分で連結。それをバトンを振り回し、舞う様に一夏への攻撃を続ける

（このままじゃ、防戦一方だ。兎に角一度距離を取って……）

自身も間合いの外に出てしまうがこのラッシュを止めるためにも一旦距離を置く。しかし――

「甘いっ！」

突然、甲龍の周りを浮遊していた非固定浮遊部位（アンロックユニット）が上下にスライド其処から見えた球体が発光すると同時に白式は見えない何かに撥ねられたように吹き飛ばされた

「なんだあれは？」

「衝撃砲ですわ」

「衝撃砲？」

ピットから試合の様子を見ていた三人。謎の攻撃に箒が疑問の声を上げるとセシリアは直ぐにそれに答えを返した

「空間に圧力をかけて砲身を生成して、その余剰で生じた衝撃を砲弾とする武器ですわ。わたくしのブルーティアーズと同じ第三世代兵器ですわね」

「一夏……」

完全な判断ミス。むやみに距離を置いてしまった所為で逆にこちらだけが間合いの外に出てしまう結果になった。その間、も飛んでくる砲撃を如何にか避けていく

「よくかわすじゃない。この『龍砲』は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

（どこかで、先手を打ってこの流れを断ち切らないと……）

ハイパーセンサーが大気の歪みを捉えているお陰で何とか避ける事は出来ている。だが、その間を縫って反撃に転じられるかと言えば答えはＮＯだ。殆ど、撃たれてから反応している様なものだ。このまま行けばジリ貧で負けるのは目に見えている

（しっかりしろ！　俺は、千冬姉と同じ武器を使ってるんだぞ！）

それは、セシリアとの試合の翌日。千冬に頼み朝連に付き合ってもらっていた日に遡る

「白式の武器ってこの雪片弐型だけなのか？」

シールドエネルギーの輝きを纏った雪片を一回二回と振り回しながら尋ねる。元々ＩＳは複数の兵装を使って戦うモノそう言う意味では自分の機体は結構不利なのでは？が

「私もそれだけで優勝した。その一振りがあれば十分だ」

そう言って、手に持った竹刀の切っ先を自分に向けてくる

「世界レベルの人と一緒にされても――」

とぼやくも、その言葉は竹刀が地面を打つ音で遮られる

「大体、お前に射撃戦闘が出来るのか？反動制御、距離の取り方、一零停止に特殊無反動旋回（アブソリュートターン）、それ以外にも弾丸の特性、大気の状態に相手の兵装との相互影響、まだまだあるぞ。出来るのか、お前に？」

「……ごめんなさい」

ハッキリって、いま千冬の言った事の半分も判らない。これらを全て一瞬で思考し判断する事が出来るかと言われてしまえば、最早、謝るしかなくなる

「お前は一つの事を極める事の方が向いているのさ。なにせお前は――」

すると、千冬の表情が今までの先生の顔から自分の良く知る姉とし

ての表情に変わり

「私の弟だ」

（本当はもう少し後に取って置きたかったが、仕方ないか）

この前、千冬から教えてもらった切り札。うまくいけば鈴相手にも確実に攻撃を当てられる、だからこそもう少し温存しておきたかったが仕方が無い

「……鈴、本気で行くからな」

「な、何よっ！？　そんなの当たり前でしょ！　兎に角、格の違いって奴を見せてあげるわっ！」

突然、一夏の雰囲気が変わった事に一瞬、うろたえるも鈴は直ぐに武器を構え突進する。そして、一夏はさっきまでと同様、逃げと守りの一手に出る。が、さっきまでと違い、しきりに自分と鈴との位置関係を気にしている

「織斑君。何か思いついたのでしょうか？」

一夏の考えが読めず、つい山田先生は口を開く。それに答えたのは

「瞬間加速（イグニッションブースト）だろう。私が教えた。一瞬でトップスピードを出し敵に接近する奇襲攻撃だ。うまく使えば、あいつでも代表候補生と渡り合う事が出来る。しかし――」

そこで言葉を切り、千冬は目付きを鋭くして

「それが通用するのは一回だけだ」

反撃を捨てて、相手の攻撃を捌く事だけなら今の自分でも出来る。そうしながら鈴の周りを飛び回り、更に準備を進める。そして遂にその時が来た。鈴の背後、既にこちらに気づき振り向こうとしているがこちらの方が早い

「うおおぉぉーーーっ！！」

気合の声と共に雪片のバリアー無効化攻撃を発動し、瞬間加速を起動させ一気に間合いを詰める。鈴は既にこちらの方を向いているがもう遅い

（間に合わないっ！？）

長年、ＩＳを使って戦ってきた勘がそう告げて今まで余裕の表情だった鈴の顔に初めて焦りが浮かぶ。やがて、雪片の一太刀が鈴を捉え様とした瞬間――

周りの観客席に流れ弾の被害が及ばぬ様、張り巡らされていた遮断シールドを突き抜け何かがアリーナに降って来た

第１５章－守られる者から守る者へ

「システム破損っ！何者かが遮断シールドを貫通して侵入してきたようです！」

一夏対鈴の試合の最中、アリーナを覆う安全用の遮断シールドが破壊され警報が鳴り響いた

「試合中止っ！織斑、凰、ただちに退避しろっ！」

それに続き、観客席に居る生徒や来賓の安全の為に緊急用のシャッターが下りる

「な、なんだっ！？何が起こってるんだ！？」

「一夏っ！　試合は中止よ。今すぐピットに戻って！」

「お前はどうするんだよ？」

一夏が尋ねると、鈴は今だ爆炎と砂煙で姿が確認できない何かに目を向けたまま

「アタシが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ」

「逃げるって……女を置いて逃げるなんてできるかよ」

「バカっ！　あんたの方が弱いんだからしょうがないでしょっ！」

と、今度はこちらの方に振り返ってキッパリと言ってきた。そう

言われてしまうとグゥの音も出ない。事実その通りであるわけだし……

「別にあたしだって最後までやり合うつもりはないわよ。こんな緊急事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾――」

「あぶねぇっ！」

その直後、爆炎の中から鈴に一筋のビームが迫り、一夏はすぐさま鈴をお姫様抱っこしてその場から離れる

「ビーム兵器かよ。しかもセシリアのＩＳより出力が上だ」

「ちょっ、ちょっとバカっ！　離しなさいよっ！」

「お、おい、暴れるな」

「う、うるさいうるさ～いっ！」

一瞬、頬を薄く赤に染めてポ～っとしていた鈴だったが直ぐに自分の今の体勢に気づき暴れ始める。その時、二人のセンサーが高エネルギー反応をキャッチ。それから一秒弱遅れて再びビームが飛んでくる。鈴を抱えたままそれを避ける一夏。そこで漸く煙が晴れて“何か”の姿が明らかになる。異様に長いアームに首が無く肩と頭部が一体化した様な形状をした黒いロボット。その頭部についた５つのカメラアイが怪しく赤く光る

「何なんだこいつ？　これでもＩＳなのか？」

一夏が疑問の声を上げるのも無理は無い。その“何か”の一番の

特徴。それは全身を覆う全身装甲（フルスキン）。従来のＩＳは体の一部。主にインナーを着ている部分や操縦者の顔は露出した状態が多い。けれど目の前のこいつはそれが無く全身が機械のパーツで覆われている

「お前、何者だよ！？　何が目的なんだっ！？」

と、一夏が目の前のＩＳに向かって叫ぶもそのＩＳは一切の反応を示さない

「織斑君、凰さん。直ぐにアリーナから脱出してください。直ぐに先生たちがＩＳで制圧しに行きます」

「いや、生徒達が避難するまで食い止めないと」

「そ、それはそうですけど……」

ピットの山田先生から直ぐに非難の指示が来るが一夏はそれを拒否

「いいな、鈴？」

「だ、誰に向かって言ってるのよ。それよりもいい加減離しなさいよ、動けないじゃないっ！」

「ああ、悪い……」

そう言って鈴を話した瞬間。敵ＩＳの腕部、手の甲の上に付けられた発射口から三発目のビームが放たれ、二人は左右に散開し回避、更に追撃に今度は背中のスラスターから煙を噴出しながらその巨体からは想像できない早さで一夏にむけて拳を突き出す。一夏がそれを再び避けると、二人の上空を取ったＩＳが肩の発射口から今度は

針の様な細かいレーザーを連射しだす
「ふん、向こうはやる気みたいね」
「そのようだな」
それぞれにそれも回避すると二人は一旦合流し、敵ＩＳを見据える
「一夏、あたしが援護してあげるから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ？」
「ああ、その通りだ。それじゃ、それで行くか」
作戦が決まると一夏は雪片のバリアー無効化攻撃を発動。鈴も龍砲の発射体勢に入った
「もしもし！？　織斑君！？　凰さんっ！？　聞いてますーっ！？」
「本人がやると言っているのだからやらせてみればいいだろう」
山田先生が必死に二人に呼びかけていると、その横から千冬がコーヒーセットの一式を持って戻ってきた
「お、お、織斑先生っ！　何をのんきな事を言っているんですか！？　早く、二人の救助に行かないと」
「これを見ろ」
そう言って千冬は画面を指差す

「こ、これは……」

「アリーナの遮断シールドがレベル４に設定され、アリーナに続くドアも全てロックされている」

「まさか、あのＩＳが？」

「だろうな。今、三年生の精鋭にシールドの解除を急がせているが、あと何分掛かるか判らない。政府にも救援を頼んだがそれの到着も時間が掛かるだろう。それまで二人には持ちこたえてもらわねばならない」

「そんな……」

「シールドの解除が済み次第、部隊をステージに突入させる。それ以外の教員は他の生徒の屋外に避難させるように。山田先生、各教員に連絡を」

流石、元世界一のＩＳ乗り。この緊急事態でもまるで動じる事無く、普段どおりに周りに指示を飛ばしている。と、其処にセシリアと真琴がやってきた

「織斑先生！　わたくし達も突入部隊に入れてください。お願いします！」

「オルコットと天乃宮か。お前達はダメだ」

「けれど、一夏と鈴が戦ってるってのに俺たちだけ指をくわえて見ているなんて――」

「まず、セシリアのＩＳは一対多数用だ。そのセシリアが多数の側に回った所で足手まといにしかならない。天乃宮に至ってはまだ訓練を始めたばかり、論外だ」

「そんな事ありませんわっ！このわたくしが足手まといだなんて」

真琴は千冬の言葉で俯き、黙り込んでしまった。が、セシリアはそれでもまだ食い下がる。すると、千冬が目を細め

「ならば、連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　味方の構成は？」

と、ずらずらと具体的な内容を挙げ始める。そしてセシリアもそれのいずれにも正確な回答を答える事が出来ずどんどん勢いが無くなっていく、けれど千冬は容赦なく

「ブルーティアーズのビットをどう使う？　連続稼働時間は？　敵はどのレベルを想定している？」

「わ、判りました。もう結構です……」

そして遂に白旗を揚げざるを得ずシュンとなってしまうのだった

「判ればいい」

「あの……織斑先生。他に私達に出来る事って無いんでしょうか？」

他の教員への指示を終えた山田先生が椅子に座ったままこちらを振り向き、千冬を見上げている。千冬はそんな彼女にコーヒーを注ぎ、一緒に持ってきた砂糖を一杯入れて

「やれる事はやった。後は状況が動くまで待つだけだ。ほら、コーヒーでも飲んで落ち着くがいい」

そう言ってコーヒーを差し出す、が

「あの織斑先生。それ、砂糖じゃなくて塩なんですが……」

「……何故、塩がこんな所に？」

「あっ、織斑先生も弟さんの事が心配なんですね」

と、言わなきゃ良いのに山田先生はそんな事を口にしてしまい、千冬のこめかみがピクッと動き

「だから、そんなうっかりミスを――」

「山田先生……」

「はい？」

その時の千冬の表情はニッコリとした笑顔。だが、その背後に何だか黒いオーラを背負っている様に真琴とセシリアには見えて。千冬は笑顔を崩さないまま

「先生は確か甘いコーヒーが好きでしたね」

と、塩を容器を直接傾けて大量投入を始め、そこで山田先生も自分の失言に気づき顔面蒼白になる

「どうぞ」

「え、でもそれ塩が入って――」

「どうぞ！」

そしてそのまま山田先生の首をクラッチ、そしてそのまま直接コーヒーを流し込み、千冬先生のＫＯ勝ち。あまりのまずさに操作盤の上に突っ伏した山田先生、気のせいが若干痙攣している様にも見える

（はぁ、こんな時に何を……）

そんな二人の様子にセシリアはため息を吐く。すると、不意にその肩に手が置かれた

「セシリア……」

「真琴さん、どうかしまし……」

セシリアの言葉はそこで止まってしまった。その時の真琴の顔はかつて自分と戦った時の……そう、戦う者としての顔つきになっていたからだ

「一夏のバカっ！　ちゃんと狙いなさいよっ！」

謎のＩＳからの攻防が開始してからこれで７度目。鈴が衝撃砲を連射し、それが命中し怯んだ所に一夏が斬り込むと言う作戦を取っていたがそれはことごとく避けられている

「ちゃんと狙ってるっつーの。あいつが早すぎるんだよ」

全身にスラスターがついているお陰でその機動力と姿勢制御力は高く、怯んだとしても直ぐに体勢を立て直し回避されている。しかも――

「一夏っ！　離れて！」

其処から更に追撃を仕掛けようにも今度はあっちの方が自分の体をコマの様に回転させてその巨大な腕で二人を殴り飛ばそうとする。加えてその間に肩口からレーザーを乱射するから二人は嫌でも間合いを置かざるを得ない

「ああもうっ！めんどくさいわねこいつ！」

そして鈴が其処に衝撃砲を撃って反撃すれば回転攻撃をやめてそれをガードする、さっきからこの繰り返し。傍から見れば拮抗しているように見えるが、二人のエネルギー残量は少しずつ減少している。つまりはこのまま行けばジリ貧でやられてしまう。加えて一夏の方はただでさえ燃費が悪い。エネルギー残量は１００を切っておりシールド無効化攻撃はあと一回が限度だ。嫌でも額に嫌な汗が滲む、けれど諦めるわけにもいかない。最後の一撃、これでどうやってあいつを倒すか、頭を働かせる。

「目に見えない衝撃砲を7回も止めるなんてなんて奴なの……」

と、自分の横でぼやいた鈴の言葉。ふと、その言葉に一夏はある事に思い当たる

（もしかしたら、あのＩＳは……）

鈴の言葉から導き出されるある仮定。もし、それが本当ならば――

「鈴、エネルギー後どれくらい残ってる？」

「１８０ってところね。現在の火力であいつのシールドを突破して機能停止させられるのは、確率的に一桁ってところね」

「０じゃなきゃいいさ」

「何か、閃いたの？」

「あいつの動きってさ、何か機械じみていないか？」

鈴のけん制から始まり、最後の衝撃砲を防ぐまでの一連の攻防、それをあのＩＳは寸分違わず７回も繰り返している。そう、一切の寸分違わずだ

「生身の人間から感じられる緩急や乱れ、そういったものが一切感じられない。あいつは本当に人が乗っているのか？」

「ちょっと待ってよ。ＩＳは人が乗らなきゃ動かないのよ、無人のＩＳなんてありえな――」

と、鈴もそこで言葉を止め、目の前に“佇む”ＩＳに目をやる

「そういえば、あいつわたしあたしたちが話している時は全然攻撃してこない……」

進入直後の時の攻撃を除き、戦闘開始から７回も繰り返した攻防

それ以外に関しては全然攻撃してこない。あくまでこちらが行動開始してから動いている。まるで、相手の動きに応じて決まった反応や動作を行うプログラムの様に

「ううん、それでも無人機だなんて絶対にありえない。ＩＳは人が乗らないと動かない、そう言う物だもの……」

「仮に、仮にだ。無人機ならどうだ？」

「何？　無人機なら勝てるって言うの？」

「ああ、無人なら全力で攻撃しても問題ないからな」

「全力でって……」

「零落白夜、雪片弐型の全力攻撃だ」

雪片弐型、その火力はＩＳの中でもトップクラスを誇る。けれど、学内対戦や訓練に置いてはそれが逆に欠点にもなりうる。機械とて万全ではない、何かの拍子で誤作動や不調をきたす事もある。その時に全力で攻撃してしまえば最悪の事態もありうる。故に一夏は今まで武器の全力を出せずに居た。が、相手が無人機ならば

「零落白夜だか何だか知らないけど、その攻撃自体が当たってないじゃない」

全力攻撃と言っても恐らく今までと同じ剣による攻撃である事には変わりない。つまり、今までの攻撃が当たってない段階でその零落白夜の攻撃も当たらないのは目に見えている

「次は当てる」

けれど、一夏はハッキリと自信に満ちた表情で宣言した。そんな一夏の姿が少しだけカッコよく見えて
不思議と何とかなるんじゃないかと思えてくる、思えてきたから

「言い切ったわね。それじゃそんな事、絶対にありえないけどあれが無人機だと仮定して攻めてみましょうか」

「よし、それじゃ俺が合図したら衝撃砲を最大威力で撃ってくれ」

「いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくても。それじゃ、早速――」

「一夏っ！！」

行動を起こそうとした正にその時、アリーナに響くのは聞きなれたもう一人の幼なじみの声だった

「あの、真琴さん。一体何処に？」

「何処にだって？決まってる、二人の所だ」

時を同じくして、大急ぎで会場から避難しようとしている生徒達の流れに逆らって走っているのは真琴とセシリアの二人だ

「確かに、今の俺たちじゃ何も出来ないかも知れないさ。だからって目の前で戦いが起こっていて、しかも其処には親友が居る。そんな時に自分だけのうのうと安全な場所に避難なんてしてられるかよ！　例え何も出来なくなくても、せめて二人の戦いを近い所で見ていたい。戦う事から背を向けるなんて真っ平だ」

「真琴さん……」

「それに、もしかしたら行けば何かしら出来る事はあるかもしれない。そうだろ？」

戦いとは刻一刻と状況が変化するもの。今は見ていることしか出来なくてもいずれは何か出来る事が出て来るかも知れない。けれどそれとてその戦場に身を置いていなければ関係無い

「そう、ですわね……その通りですわ！」

真琴の言葉を聞き、セシリアの目にも光が宿る。真琴は一つ頷くと

「それじゃ、急いで――」

『一夏っ！！』

突然響いた声に、二人は一瞬だけ足を止めて

「今の声……？」

「篠ノ之さん？　一体何処から？」

と、その時真琴がフッと笑みを浮かべ」

「考える事はあの幼なじみも同じってことか。急ぐぞ、セシリア」

そう言って再び走り出し、セシリアもそれに続く

「男なら……男ならそれぐらいの敵に勝てなくてなんとするっ！」

「まずい、箒、逃げろっ！」

新たに現れた侵入者、それを認識するとＩＳは二本の腕の発射口を箒に向けた。けれど、箒は一瞬怯んだだけで直ぐに何時もの鋭い視線を敵ＩＳに向ける

「鈴っ！　やれっ！」

「判った！　龍砲最大出力、いくわよっ！」

鈴が龍砲の発射体勢に入り、その不可視の砲身をＩＳに向ける。しかし次の瞬間、その斜線軸上に一夏が飛び込んできた

「ちょ、ちょっとバカっ！　何してんのよ！？　どきなさいよ！」

「いいから撃てっ！」

「ああっ、もう！　どうなっても知らないわよーっ！」

半ばやけくそ気味に叫ぶと鈴は龍砲を一夏に向けて放ち、一夏はそれを背に受ける。傍から見ればただ単にダメージを受けただけだが、それ以外にも意味がある。瞬間加速、それを使う際は放出したエネルギーを吸収すると言うプロセスを取るが何もそのエネルギーは何も自身が放出したものでなくても構わない。そう……まさに今、その背に受けている龍砲のエネルギーでもだ

「うおぉぉぉーーーっ！」

気合の雄叫びと共に一夏は翔ける

（俺は――）

何時も千冬姉に守られるだけだった。“あの時”もそう、自分だけじゃ何も出来なくて、千冬姉が助けに来てくれたからここに居る。俺は何時も千冬姉と、雪片に守られていた

（俺は千冬姉を、箒を、鈴を――）

そして今、俺の手の中には同じものがある。何時も自分を守ってくれた千冬姉の刀、雪片が。ならばもう、守られるだけの関係は終わりにしたい。今度は俺がこの雪片で、この力で！

（関わる人全てを――）

一夏の決意、それに呼応する様に雪片の刀身が左右に展開し、そこから純粋なエネルギーの刀身が姿を現す。零落白夜、シールドのみならずエネルギー質のモノ全てを斬り裂く、雪片最強の刃。それを振りかざし

「守るっ！」

渾身の力で振り下ろす。そしてそれはいま正に箒を撃とうとしていたＩＳシールドを斬り裂き、ＩＳの片腕を斬り飛ばす。斬り落とされた腕から赤黒い液体が噴出す。それは血ではなくオイル、そして腕を切り落とされたにも関わらずＩＳはのたうち回るどころか怯みもせず残った片腕で一夏を殴り飛ばした

「「一夏っ！」」

其処に響く鈴と箒の声。ＩＳはそのまま壁に叩きつけられた一夏にゆっくりと近づき、腕の発射口を向け、エネルギーをチャージする。その様子を一夏は黙って見ていたがやがて口元に笑みが浮かび

「狙いは？」

何かに向かってそう尋ねた次の瞬間――

「完璧ですわっ！」

飛来する４つのビット、其処から放たれる青いレーザーがＩＳに降り注ぐ

「セシリアっ！？」

「あんた、何時の間に！？」

アリーナの観客席、その最上段にブルーティアーズを装備したセシリアの姿。そして

「悪いな、一夏」

体勢を崩したＩＳの傍に着地するもう一機のＩＳ。手足に紫の炎を纏った、敵ＩＳよりも更に深い漆黒の影。

「おいしい所は、俺がもらったっ！！」

羅刹を装着した真琴が敵ＩＳに蹴りの連打を浴びせ、サマーソルトで蹴りあげる。そして、宙に浮いた相手の脚部、人で言うなら膝にあたる部分に足を引っ掛け

「覇王、空円脚っ！」

そのまま上段回し蹴りをＩＳの頭部に叩き込む。シールドバリアーは一夏の一撃で即に無効化され、更に無人機ならば操縦者を守る為の絶対防御システムも搭載されていない。強靭な一撃をモロに喰らいＩＳは頭部を大きくひしゃげさせ地面に仰向けに落下、砂塵が立ちこもり姿が見えなくなり真琴はその傍に着地、羅刹断撃をＯＦＦにして砂塵に目を向ける

「ギリギリのタイミングでしたわ」

ようやく、アリーナに到着した二人。丁度それは零落白夜を発動させた一夏がＩＳの腕を斬り飛ばした時だった。その一撃はシール

ドバリアーだけでなく遮断シールドも破壊、そして二人は同時にＩＳを展開し突入したと言う訳だ

「二人なら、やってくれると思ってたさ」

「そ、そうですの？　と、当然ですわね」

「ご期待に添えたようで何より、ってな」

一夏からの真っ直ぐな信頼の言葉。それにセシリアは少し気恥ずかしそうに答え、真琴は笑顔で冗談交じりに言葉を返す。と、真琴は自分の近くに落ちていた一夏が斬り落としたＩＳの腕に目を向けると

「どうやら本当に無人機の様だな」

切り口から見えるのは人の腕では無く機械の断面、其処から今だ燃料と思われるオイルが漏れている

「そんな、無人のＩＳが開発されたなんて聞いた事も無いわよ……」

「何処かの国が開発に成功して利権の為に黙っていた、と言う事でしょうか？」

観察を終えてから真琴が言った言葉に鈴は信じられないと首を横に振ってから呟き、セシリアは自分の予測を述べる

「何にしてもこれで終わりだ」

「そう、だな。後の事は先生達に任せて俺たちは戻――」

「真琴離れてっ！　あいつまだ動いてるっ！！」

「なにっ！？　がはっ！」

気にはなるが今の自分達じゃこれ以上はどうしようも無い。後の事は大人達に任せると言う結論に達し、真琴が敵ＩＳに背を向けた直後、一夏達の機体に表示された敵ＩＳ再起動を告げる警告メッセージ。そして、敵ＩＳと一番近くにいた真琴がそっちに向き直った瞬間、いまだ立ち込める砂塵から現れた豪腕が真琴の腹に直撃し吹き飛ばす

「真琴さんっ！！」

シールドバリアーのお陰でダメージは薄い。けれど喰らった衝撃は大きく真琴は腹部を押えたまま肩膝立ちになる。その視線の先にはいま正に放たれこちらに迫るレーザー。回避は間に合わない、そう判断し、腕をクロスさせて防御姿勢に入る。しかし、その瞬間自分の横を何かが駆け抜けた

「一夏っ！！」

「おおぉーーーーっ！！」

一夏はそのまま相手の雪片を構え、レーザーの中に飛び込んだ

結局、あの後対抗試合は中止となり侵入してきたＩＳはやって来た教師部隊に回収され、その場はそれでお開きとなった。そんな騒ぎもようやく落ち着いてきた夕暮れ。保健室にはベットに横たわっている少年と一人の少女、一夏と鈴の姿があった。あの後、敵ＩＳには一夏がトドメをさした。けれど、相手のレーザーをモロに喰らった事で一夏は敵ＩＳの機能停止と同時に気絶し今に至る。そんな一夏の姿を見詰めていた鈴だったが急に立ち上がり一夏の傍に行くと、ゆっくりと自分の唇を一夏のそれに近づけていく

「鈴……？」

鼻先３センチと言う所で一夏が目を開けると、鈴は弾かれたように一夏から距離を取り、一夏もゆっくりを上半身を起こす。

「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

「何、焦ってんだ？　お前」

「あ、焦ってなんか無いわよ。勝手なこと言わないでよ、バカッ！」

「あのＩＳはどうなったんだ？」

「動かなくかったわ。心配しなくても怪我人はあんた以外無し。真琴の方ももうピンピンしてるわ」

「そうか……」

ホッとしたのか、気の抜けた様に返事をすると一夏は窓の外を眺める。オレンジ色に染まり始めた夕暮れ空を眺めながら

「『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だったか？」

「えっ？」

「ほら、小学校の頃にした約束。あの約束ってもしかして違う意味なのか？　俺はてっきりタダ飯を喰わせてくれるって意味かと思ってたんだが」

「ち、違わない、違わないわよっ！　ほらっ、料理って人に食べてもらった方が上達するじゃない？」

「お前の酢豚も食ってみたいけど鈴の親父さんの料理もうまいもんな。また食べたいぜ」

それからアハハハとごまかす様な笑い声を鈴は上げる。まぁ、ごまかす様な、というよりホントにごまかしているのだが。そんな鈴の様子に気づかず話しかけるが、一夏の言葉を聞くと鈴の表情が少し暗くなる

「あ、その……お店はもうしないんだ。あたしの両親、離婚しちゃったから。中国に帰ったのもその所為……」

一夏も鈴もお互いに黙り込んでしまったが、やがて一夏が再び口を開く

「なぁ、鈴」

「ん？」

「今度、何処か遊びに行くか」

「えっ？　それって、デート――」

「一夏、見舞いにきてやったぞ。調子は、ってどうしてお前が此処にいる！？　一夏が起きるまで抜け駆けは無しと言う話ではなかったのか？」

と、其処にやって来た来訪者。箒は鈴の姿を見つけると鈴に詰め寄ってきた。鈴も箒の剣幕に一瞬だけ気圧されるも

「な、何よっ！　そう言う箒の方だってあたしに隠れて抜け駆けしようとしたから此処に来たんじゃないの！？」

直ぐに反撃に移る。確かに、この時間に箒が此処に来る事なんて鈴は知らなかった。つまり、偶然自分が先に来ていただけで、結局、箒の方も抜け駆けに来ていたという事になり図星な為、箒もうろたえ出す

「兎に角、此処から出てってよっ！　一夏はあたしの幼なじみなんだから」

「それを言うなら私もだ！　しかも鈴は二番、一番の幼なじみはあくまで私だ」

「そんなの関係ないでしょっ！！」

と、二人してにらみ合い。一夏は二人の様子を見て何でこの二人はこうも仲がよくないのか、と的外れな疑問を抱き

（箒も誘って三人で遊びに行くか）

と、自ら修羅場を作り出す様な提案を思いつき、後日鈴と箒の板ばさみに会うのは別の話

「やっぱり、無人機の様ですね」

学校の地下深く、学園関係者以外、立ち入りのエリア。其処では襲撃してきたＩＳの解析が行われていた

「どんな方法で動いていたか不明ですが、最後の織斑君の一撃で機能中枢を斬られ修復は不可能です」

「そうか……」

そして解析を行っていたのは千冬と真耶の二人

「しかも、このＩＳには未登録の何処にも属さないコアが使われていました。これは一体……」

ＩＳのコアは全部で４６７個とされている。が、このＩＳはその

どれでもないつまり４６“８”個目のコアが使われている事となる

「やはり、な」

「織斑先生、心当たりが？」

「いや、今はまだ無い。今は、な」

少年少女の学園生活が始まった春。それと同時に得たいの知れない何かもひそかに動き始める。けれどそれを少年達は知る事はまだ無く、真実に一番近いところに居る女性もそれを告げる意思は無い。世界はまだ平穏そのものだった

第１５章ー守られる者から守る者へ（後書き）

ようやく、一巻の話が終了。次回は学年別トーナメント編に突入します。主人公の見せ場、何処にいれるか……

第１６章－真琴と一夏の平穏な一日（前書き）

ようやく原作第2巻に突入します

第１６章－真琴と一夏の平穏な一日

「お前達以外、全員女子か。さぞかし毎日いい思いをしてんだろうな」

「してねーよ」

「嘘をつくな、嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねぇか」

ここは何時ものＩＳ学園、ではなく中学時代の二人の親友、五反田　弾（ごだんだ　だん）の家。三人は弾の部屋でジュース片手にＩＳをモチーフに作られた格闘ゲームをしている。今は真琴対弾で一夏は二人の後ろでベッドに座ってジュースを飲んでいる

「いまでこそ少し落ち着いたけどよ、入学当初は二人揃って珍獣扱い。毎日の様に他の生徒の興味の視線にさらされてたんだぞ」

「それがなんだ！　最初は興味本位でも其処から始まる恋だってあるんだぞ。男女の仲ってのは何処から発展してくるか判らないんだぜ。おら、これでどうだ」

「なっ！？　汚ねぇ、ハイパーモードではめ殺しはねぇだろ！」

「うるせっ、世の男達の嫉妬を喰らえっ！」

「更に終わり際に奥義、だと！？」

攻撃力ＵＰ，機動力ＵＰに加えて攻撃を受けても一切怯まなくなるハイパーモードで一気に削り、挙句の果てに終わり際の絶妙なタ

イミングに超必殺技発動で真琴は完膚無きまでに叩きのめされた。
おそるべしは男の嫉妬パワー

「まぁ、でも鈴が転校してきてくれて助かったよ。話し相手すくなかったからなぁ」

「ああ、鈴か……鈴ね」

と、ジュースを飲みながら言った一夏の一言に弾が微妙な反応をしていると、突然ドアが勢いよく開き、其処には弾の妹、蘭の姿。足を突き出していた辺りどうやらドアを蹴り開けたと行った所だろう

「お兄、お昼出来たよ。さっさと食べに来なさ……真琴さんに、い、一夏さん！？」

用件だけを伝えて下に戻ろうとした時、部屋の中に居る二人に気づくと驚きに目を見開いた

「あっ、蘭。久しぶり、邪魔している」

すると、蘭はいきなり自分の服装を見下ろす。本来なら肩まで伸びている髪をクリップで留めて更にジーパンのショートパンツにタンクトップ、ジーパンの方は腰のボタンは外したりと着崩した格好になっている。蘭はいきなりドアの向こうに隠れると身なりを整え、姿を現す

「あっ、い、いや……あの、き、来てたんですか？」

「俺も一夏もこの休日に家の様子見に来てな、そんでついでによってみた」

「蘭、お前ノックぐらいしろよ。恥知らずな女だと思われ……っ！」
弾の言葉はそこで詰まる。其処には険しい表情で自分を睨む蘭の姿。小声で「なんで言わないのよ！？」と拳をわなわなと震わせていた
「あ、あれ、言ってなかったか……？　そうか、そりゃ悪かった」
アハハハとごまかす様に笑う弾。そんな兄妹の様子を一夏は不思議そうに眺めていのだった
「あ、あの、ゆっくりしていって下さいね」
それから、一夏対弾も男達の嫉妬コンボ（ハイパーモード＋奥義）で一夏の惨敗に終った所で三人は一階の食堂スペースでお昼をご馳走になっていた
「時に真琴」
「ん？」
「お前、少し雰囲気変わった？」
「あ、それは私も思ってました。何か素っ気無さがなくなっている感じが」
野菜炒めを口に入れた所で二人が真琴に言うと真琴は野菜炒めを飲み込んで

「五反田兄妹よ、お前らもか」

「は？」

「いや、なんでもない」

と、神妙な顔つきで某エジプトの王様の様な言葉を口にした後、ごまかす様に味噌汁を啜った

「ところで、蘭、着替えたんだな？」

「あっ、いえ、これは……その、ですね」

一夏の言うとおり、今の蘭の服装は清楚なワンピースに身を包み、短く縛ってまとめていた髪も下ろしている。一夏の指摘にしどろもどろになっていると一夏は何か閃いたように

「判った。デートか？」

「違いますっ！」

「え？」

「なぁ、真琴……」

「ん？」

蘭のテーブルを叩くほどの力強い否定に一夏が呆気に取られている横で弾がお茶を一口飲んでから真琴に話を振る

「一夏って、学校でもこんな調子なのか？」

「ああ、まぁな。鈴と箒と一夏で見事な三角関係作ってると言うのに、わざわざこの間、二人を誘って遊びに行ったぐらいだからな」

「あ、あの真琴さん。その箒さんって一体？」

流石は蘭、こっちの会話に参加してなくても、そういった女の気配には鋭い

「ああ、蘭は知らなかったか。鈴の前の幼なじみ、ファースト幼なじみって奴さ。因みに鈴がセカンドだ」

そして――

「ああ、あの……」

「そうそう、その箒と同じ部屋だったんだよ。まぁ、今は――」

「お、同じ部屋っ！？」

この鈍感キングはこの手の爆弾発言をサラッと口にしてしまうから事態は更に荒れる訳だ

「ああ、でもそれは先月までの話で今は真琴と同じ部屋になっている。」

「ようやく、ごく普通な形に落ち着いたってところだな」

「い、一ヶ月以上もどうせ……同居していたんですか？」

「ああ、まぁそうなるな」

と、ここで蘭は俯いて何かを考え込んでる。やがて、意を決したように顔を上げると

「決めました。私、来年ＩＳ学園受験します」

「お、お前、何言って――」

その直後、口に物入れながら喋った事＋食事中に立った事で厨房に居る、兄妹の親父さんが投げたオタマが弾を直撃、そのまま椅子ごと後ろにぶっ倒れた

「でも、いいのか？蘭の通ってる学校ってエスカレーター式で大学まで行けるしネームバリューだってある所だろ？」

大学は行けるわ、学校の名前は知れてるわ就職に置いて断然優位に立てる場所だ。それを捨てるのはかなりもったいない気がする

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「あ、ＩＳ学園に推薦はないぞ……」

と、ここでおたまアタックで沈んでいた弾がよろよろと復活し抗議する

「私なら筆記で余裕です」

と、頑なに意見を曲げない蘭に弾は少し考えた後、縋る様に二人

に目を向けると

「なぁ、あそこって実技あるよな？　なっ？」

「あ、ああ。ＩＳの起動試験ってのがあってそこで適正の無い奴は落とされるらしい」

そう、ＩＳ学園の試験はまず最初にＩＳを動かせるかどうかを調べる所から始まり、それを突破した人が筆記を受けれる。尤も二人の場合は前代未聞のイレギュラーと言う事で筆記は見事に免除となっている。すると蘭は無言でポケットから何かの紙を出して弾に見せた

「げぇっ！？」

すると、弾がまるで戦国の某武将を目撃した兵士みたいな声を上げてその表情を歪める。一夏と真琴もそれに続いて用紙を覗くと

「ＩＳ簡易適正試験……」

「Ａランクって、マジかよ……」

「その問題も既に解決済みです」

ＩＳ簡易適正試験と言うのは政府がＩＳ操縦者を募集する上で行っている任意で受けれる簡単な実技試験みたいなものだ（勿論タダで）。それでＡランクを叩き出したとなれば本番の適正試験も最低でもＢは固いだろう

「で、ですので、一夏さんにはセンパイとしてご指導を」

「ああいいぜ。受かったらな」

「や、約束しましたよ！？　絶対、絶対ですからねっ！」

（一夏……、更に箒達のライバル呼び込む様な真似してどうなっても知らんぞ）

「では、そういう事で。ごちそうさまでした」

そう言って、食べ終わった食器を下げに蘭が厨房に引っ込む。すると、弾はいきなり一夏の肩を掴むと

「おい、一夏。お前今すぐ彼女作れ！」

「はぁっ！？」

「はぁ！？　じゃねぇ！　今すぐ作れ！　今年、いや、今月中！「お兄……」っ！？」

そこで一夏の体を揺らす弾の手が止まる。其処には背中に鬼、否、阿修羅を背負っているかのような蘭の姿。そして彼女が何を言いたいか弾にはすぐ判った

『余計ナヲコトスルナ』

やがて、一夏と真琴が唖然とこちらを見ている事に気づくと蘭は誤魔化す様に笑うと「では、ゆっくりしていって下さいね」と厨房に引っ込んでいったのだった

その日の夜――

「はい、どちら様で……箒？」

真琴がシャワーを浴びている時、突然ドアが勢いよくノックされ一夏が出ると其処に居たのは腕を組んでいる箒の姿

「なんだ、忘れ物でもしたか？」

と、一夏が問うも箒は無言のまま、普段より若干鋭さの増した表情で一夏をジッと見ている

「まぁ、いいや。兎に角、あがれよ」

「いや、ここでいい」

それから数秒無言の時間が続く。沈黙に耐え切れず、一夏が何か言おうとした所で箒が意を決して口を開く

「い、一夏……」

「お、おう」

「次の学年別トーナメントで、私が優勝したら、わ、私と……」

そこで、箒は言葉を切り、そして――

「つ、付き合ってもらう！！」

ビシッっと一夏に指を突きつけてそう宣言した」

「……はい？」

真琴と一夏の平穏な休日は箒のこの宣言によって幕を閉じたのだった

第17章『ボーイ・ミーツ・ボーイ?』

その日、クラスはとある噂で持ちきりになっていた。それは――

「ねぇ、聞いた？　あの噂の事」

「聞いた聞いた。何でも、次の学年別トーナメントで優勝したら織斑君や天乃宮君と付き合えるんだって！」

なんで、そんな噂が立っているのかと言うと原因は箒の『自分が優勝したら付き合ってもらう』と言う宣言。それを偶然、盗み聞きした女子生徒がそれを他の女子に広め始めたのだが、噂が広まっていく過程でその内容は伝言ゲームよろしくどんどん変容し、更には女子達の願望も相成って噂は殆ど原型をとどめてない形で広まってしまっていた

「おはよっ！　何の話をしてるんだ？」

「「「なんでもないよっ！」」」

と、そこに噂の人物、一夏と真琴がやって来て一夏がいつも以上にクラスが盛り上がってる事を尋ねると口を合わせてなんでも無いと話を切った

「席に着け、授業を始めるぞ」

そしてこちらはそんな事は微塵も気にせず何時も通り教室に入ってくる二人の先生。他の生徒たちも自分の席に着き、後は何時も通りＳＨＲが始まるだけ、なのだが今日は違った。山田先生が壇上に

上がり、生徒達を見渡した後に

「今日はなんと、転校生を紹介します！」

と、嬉々して言った後に、教室のドアに目を向ける。すると、ドアが開き其処から一人の生徒が入ってくる。その転校生の姿に一夏や真琴も含め、全員が釘付けになる。濃い目の金色のロングヘアーを首の辺りで束ねた、中性的な顔つきをした華奢な人物。けれど、クラスが釘付けになっているのはそれが理由ではない

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました、皆さんよろしくお願いします」

シャルルの着ている制服、それは一夏や真琴と着ているのと同じ種類。つまり

「男？」

「はい、此処に僕と同じ境遇の人が居ると聞いて。本国より転入を――」

と、ここでシャルルの言葉はキャーッ！と言う女子の歓声によって遮られる

「男の子！　三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたいタイプ！」

「あーっ！　騒ぐな、静かにしろっ！」

と、千冬が教壇を叩いて他の生徒を黙らせると

「織斑、天乃宮。同じ男子としてデュノアの面倒を見てやれ」

「あ、はい……」

「了解、っと」

「よし、それでは今日は2組と合同で実習授業を行う。各人、ＩＳスーツに着替えたら第二グラウンドに集合だ」

転入生の紹介が終れば、即授業。手短に用件を伝えると先生たちも準備をしに教室を後にする。シャルルも一度、自分の席に向かうべく動き出すが一夏の近くを通り掛かったとき、その足を止めて

「君が織斑君だよね？　はじめまして僕は――」

「あ、紹介は後でいいから。今は兎に角移動だ。行くぞ、真琴」

「ああ、にしても、実習のたんびにこれだと疲れるな、全く……」

と、真琴もＩＳスーツの入った袋を肩に担ぎ教室を飛び出し、一夏もシャルルの手を取ると同じく教室を後にした

「俺たち男子は空いてるアリーナの更衣室で着替えてるんだ。実習のたんびにこれだから早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

何度も言うがＩＳ学園は今まで女子だけしか通っていなかった。故に当然ながら男子更衣室なんて存在しない。その為、一夏と真琴は実習のたんびにアリーナの更衣室まで走らなければならない。着替えに時間が掛かって遅れました。そんな言い訳は、あの千冬には通用しないからだ。と、シャルルに説明をしている一夏がシャルルが落ち着きが無い事に気づく。一夏の手に握られた自分の手を凝視して、妙にソワソワしている

「どうした。あっ、トイレか？」

「ち、違うよっ！」

「そうか、それは良かった。それより一夏、シャルル、どうやらお出ましのようだぜ」

と、真琴が足を止める。その次の瞬間、一番奥の曲がり角から他の生徒の集団がやってきた。実際、学園が始まってからしばらくは実習の移動のたびに噂の男子の情報を集めようと女子生徒達が押しかけてきた。が、それも時が過ぎていくと次第に沈静化していたのだが、そこに第三の男子の登場。当然ながらこうなる訳だ

「居たっ！　噂の転校生よ！」

「しかも、織斑君たちと一緒！」

そしてその声を聞きつけ、後ろの方からも女子生徒がやってくる

「いたっ！　こっちよ」

「者ども、出あえ出あえ！」

「こっちだ」

「二人の黒髪もいいけど、転入生の金髪もいいわねぇ～」

「見てっ！　織斑君と転入生が手をつないでる！」

キャーキャーと騒ぎながら三人を包囲する女子達。やがて一夏はすぐ横の通路に二人を呼ぶ

「こっちだ」

「あっ！　逃げたっ！」

「待ってっ！　せめて写真を……」

と、其処に何時かの捏造記者こと黛薫子かカメラを持って現れるもその時には既に三人は奥の通路に消えた後だった

「な、なに？　なんでみんな騒いでるの？」

「そりゃ、この学園には男子は俺たちしか居ないからな」

「と言うか、俺たちは世界的なイレギュラーなんだ。この学園のみならず世界的にも騒がれてるんだぜ」

「あ、そっか……そう、だよね」

と、漸く事態を飲み込み納得するシャルル。けれど、何処か言葉

の歯切れが悪い。が、今の二人は兎に角更衣室への移動に集中していた為、それに気づかなかった

「漸く到着か。女子達の襲撃もあった所為でギリギリだな。さっさと着替えるぞ」

それから5分後、やっと更衣室に到着した三人。時間も押しており、一夏と真琴は大急ぎで上のシャツを脱ぎ捨てた

「うわぁ！？」

と、その瞬間、シャルルが短く叫んだので二人が一度手を止めて、シャルルの方に向き直った

「なんだ？　荷物でも忘れたのか。兎に角早く着替えないと遅れるぞ。うちらの担任はそりゃもう時間に厳しい人で」

ほんの僅かでも授業に遅れようものなら即、出席簿と言うぐらい厳しいのだ。鬼教官こと織斑千冬と言う女性は

「う、うん。着替えるよ……。だから、その、あっちを向いてて、ね？」

「まぁ、別に着替えをじろじろ見る趣味は無いけどな」

そう言って、二人はシャルルから視線を外し着替えを再会する。前に、一夏がもう一度シャルルの方に目をやると

「何でもいいけど急いで、って着替えるの早いな？」

その言葉につられ真琴もシャルルの方に目をやると其処には殆ど着替えを終えて、待機状態にした自分のＩＳのペンダントを首にかけてるところだった

「そ、そうかな？」

「何かコツでもあるのか？」

「いやぁ、特に無いよ」

若干、声をうわずらせながら誤魔化すようにアハハハと笑っているシャルルに疑問に思いながらも一夏は自分のＩＳスーツを手に取る

「それにしてもこれを着る時って裸ってのが着づらいんだよなぁ」

「まぁな、着物みたいにぶかぶかしてるわけじゃないから引っかかるんだよな」

「ひ、引っかかって……」

愚痴りながらもＩＳスーツに腕を通しながら二人が話す。するとなぜかそれを聞いていたシャルルは顔を真っ赤にして少し俯いていた。そして二人もようやく着替え終わり、改めてシャルルの方に向き直る

「そういえば、そのスーツ着易そうだな」

「デュノア社製のオリジナルだよ」

「デュノア？　確かシャルルの苗字も……」

「うん。父がね、社長をやっているんだ。一応、フランスで一番大きなＩＳ会社だよ」

「へぇ～、社長の息子かぁ。道理でな」

「道理で、って？」

「いや、なんつーか。気品っていうか。いい所の育ちって感じするじゃん。納得したわ」

「うん……」

一夏は褒めたつもりだったのだが、シャルルは少し複雑そうな表情をしている。二人はシャルルの反応に疑問を覚えるも、本人の雰囲気からしてあまり触れるべきじゃ無いとそれ以上は聞かなかった

第１８章『どんな人でも教師には敬意を持って接しましょう』（前書き）

次話投稿まで３ヶ月も時間を置いてし待まいスイマセンでした。

と言うのも原作の作者が何だかおかしな方向に行ってるらしく、原作自体も完結するかどうか怪しくなってきた手前、どうしようかと悩んでいましたが他の方のＩＳ小説を読んで、それならそれで俺もオリジナル展開ばっちこーいと言う結論に至り、更新を再開する事にしました

第１８章『どんな人でも教師には敬意を持って接しましょう』

「それでは、今日より実際にＩＳを使った実践訓練に入る！」

ジャージ姿に最早お馴染みの出席簿と言う千冬の一言に何時もより倍近くのボリュームの返事が返ってくる。と言うのも、この授業は２組と合同で行われている為、純粋に生徒の数が倍になっているのだ。そしてその横には今回の授業で使われる打金が置かれている

「それではまず、ＩＳバトルを実演してもらう。凰！　オルコット！」

そして、一組と二組の代表候補生に声を掛ける

「専用機持ちならすぐに始められるだろ？　前に来い」

「はぁ、メンドクサ……」

「なんか、こう言うのは見世物みたいで気が進みませんわね……」

まぁ、特に意味も無くバトルをする訳だしめんどくさいと感じるのは当然の事。が、相手が千冬では断るのはまず不可能だろう、仕方なく前に出てくる二人

「お前達、もっとやる気を出せ」

普通なら「もっとシャキっとしろ！」と出席簿が入りそうだが千冬はそれぐらいは想定済み、故に二人にやる気を出させる手段もしっかり用意している

「あいつら（一夏と真琴）にいい所見せるチャンスだぞ」

「やはり、ここはイギリス代表候補生。セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの」

次の千冬の一言に二人は目を見開いたかと思うと手の平返した様に態度が一変。セシリアと鈴の表情にはやる気が満ち溢れ、突然の変わり身の早さに生徒一同、若干ひいている……

「織斑先生、なんて言ったの？」

「俺が知るかよ……」

「それで……あいてはどちらに？　わたくしは別に鈴さんでも構いませんわよ？」

「それはこっちの台詞よ」

良い所を見せるといえど、それなりに強い相手でなければ話にならない。ならばやはり相手は代表候補生クラスでないといけない。同じ事を考え、セシリアと鈴が互いに火花を散らしていたが

「慌てるな馬鹿ども……対戦相手は別に居る」

二人を宥めると千冬は空へと目を向けた。すると空から何かが降りて――

「あああぁーー！　ど、退いてくださーい！！」

否、降って来た。その何か……唐草色を基調としたＩＳを纏った山田先生が一夏に向かって降って来る。それに気づいた周りはいち早く退避。けれど一夏は見事に逃げ遅れる。とりあえず、一夏は白式を展開、衝撃に備えると山田先生はそのまま一夏に衝突、盛大な砂煙が上がる。

「いっててて……一体何が……」

そして身体を起こそうと手を伸ばすと

「ひゃん！」

一夏の手が何か柔らかいものに辺り、やがて砂煙が晴れて視界がハッキリしてくる。そこに映っていたのは――

「お約束……」

「あ、あはははは……」

真琴が呆れ気味に口にし、シャルは苦笑を浮かべている。そう、真琴の言うとおり一夏の手はこの手のトラブルの定番に則り、山田先生の胸に当てられている

「あ、あの、ですね……困ります、こんな所で……いえ、場所だけでなく私と織斑君は生徒と教師で……ああ、でもこのまま行けば織斑先生が義姉さんって事で、それはそれで魅力的な」

等と顔を赤くし、うろたえ８割、千冬がらみで満更でも無い感じ

２割でしどろもどろになっている。そしてたとえ唐変木でも一夏も男。ぼんやりとやわらかいなぁ等と思うのは男の悲しい性なのだろう。が、次の瞬間――

「一夏ぁっ！」

セカンド幼馴染の怒号に一夏は我に返り、大急ぎで山田先生から離れる。セシリアが手で口元を隠し、周りの女子生徒（何故にかシャルも）が軒並み顔を赤くしている所で箒は物凄く表情を険しくし、更に鈴の怒りは怒髪天を突いて一夏に向かって遠慮なく衝撃砲をぶっ放す

「死ねぇっ！」

そして続けて連結させた双天牙月を全力投擲。一夏はマトリックス張りの仰け反りでそれを避けるもそこで姿勢を崩して後ろに転倒。更に、転倒した一夏の視界に映ったのはブーメラン宜しく自分の方に戻ってくる双天牙月、流石にこの姿勢じゃ回避も間に合わない。哀れ一夏に直撃と思われた瞬間、双天牙月に何かが数発直撃し、武器の軌道を変化させた。鈴が思わず、その方向に目を向けると

「織斑君。大丈夫でしたか？」

いつも通りの笑顔で一夏に声を掛ける山田先生。しかしその姿勢はうつ伏せの状態でその手にはさっき双天牙月を狙撃したと思われるライフルが握られている。あんだけ高速で飛んでいる武器を正確に射抜いたのだ。とてもではないが一夏の試験の時に自ら壁に突っ込んでＫＯしたり、ＩＳの制御を失敗して墜落した人間と同じとは思えない

「山田先生は日本の代表候補生まで上り詰めた人だ。あれぐらいの射撃は造作も無い」

「そんな、昔の事ですよ。それに候補生止まりでしたし」

山田先生はライフルをしまい、立ち上がる。今までの山田先生とは段違いの姿に生徒全員が唖然としていると「さて」と千冬は鈴とセシリアに声を掛ける

「何時まで呆けている小娘ども。さっさと始めるぞ」

「え？　あの、二対一で？」

「いや、流石にそれは……」

確かにさっきの狙撃はすごかったがこちらは同じ代表候補生が2名、しかも山田先生の使っているＩＳはラファール・リヴァイブと言う量産型、それに対しこちらは専用機。性能差も歴然だ

「安心しろ、今のお前達ならすぐ負ける」

その千冬の挑発に二人は表情を険しくし、3人はスタンバイをするべく空に飛んでいく

「それでは……始めっ！」

千冬が試合開始の合図をすると同時にセシリアはブルーティアーズで先制を取り、鈴もセシリアの射撃の邪魔にならん様に衝撃砲で仕掛ける

「さて、デュノア。山田先生の使っているＩＳの説明をしてみろ」

「はい、織斑先生」

そして、攻撃が途切れた所で山田先生はアサルトライフルでセシリアに反撃し、セシリアはそれを冷静に回避している

「山田先生の使っているＩＳはデュノア社制『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代最後発の機体ですが、そのスペックは第三世代にも劣らないもので安定した性能と高い汎用性、そして豊富な後付武装が特徴の機体です」

山田先生の攻撃を回避していたセシリアだが、やがて衝撃砲で攻撃を続けていた鈴と衝突した。回避できていたと思っていたがその実、山田先生はセシリアの回避先を読み、鈴と衝突する様に誘導してたのだ

「現在、生産されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第３位のシェアを持ち、１２カ国で正式に採用されています」

「「きゃあぁ～～～っ！！」」

そこまで説明した所で鈴とセシリアが二人仲良く地面に墜落した。衝突し、怯んだ所に山田先生はグレネードランチャーを二人に撃ちこみ、ゲームセット。山田先生が人数、機体性能、その全てのハンデをひっくり返し圧倒的勝利と言う形で幕をとじた

「あ、あんたねぇ……なに面白い様に回避先読まれてんのよ！？」

「鈴さんこそ！　無駄にバカスカ撃つのがいけないのですわ！！」

そして再び互いににらみ合う。そんな二人を無視して千冬は生徒達に向き直り

「これで諸君にも教員を実力が判って貰えただろう。以後は敬意を持って接するように」

それに続けて山田先生も地面に降りてきて、何時もの優しい笑顔を生徒達に向けるがそれが物凄く頼もしく見えた生徒は真琴だけではないだろう

第１９章授業は真面目に受けましょう

現代表候補生対元代表候補生の実戦演習も終了し、いよいよ本格的なＩＳの操作に関する授業に入る事になった

「さて、此処からは各グループに分かれてＩＳの起動から歩行までを行ってもらう。グループのリーダーは専用機持ちがやる事、いいな？　では、各自グループに分かれ――」

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「天乃宮君、分からない所教えて」

「デュノア君の操縦技術見てみたいな～」

と、千冬が言った瞬間、２クラス分の女子が男３人の班に入るべく一斉に押し寄せる。これに対して一夏、シャルは対応に困り苦笑、真琴は予想通りの展開にどうしたものかと軽く頭を押さえる

「馬鹿者どもが……。出席番号順にグループに入れ！　順番は天乃宮、織斑、オルコット、デュノア、凰の順番だ。次にもたつくやつが居ればＩＳを背負ってグラウンド１００週させるからな！」

グループ分けを生徒達に一任すれば当然こうなる。珍しくそれを失念していた千冬は自分の浅慮と余りにお決まりの展開の２重の意味で溜息を吐いてから声を挙げた。すると、それから２分と掛からず班分けは終了、女子生徒の反応も一喜一憂である。何はともあれ漸く授業は再開され、真琴たちは各自ＩＳに関する基礎的な説明を始める

「勝手に触っちゃダメよー」

と、鈴が打金に触ろうとしていた生徒に軽く注意をした所で、一夏の方に目を向ける。そこにも自分と同じ様にＩＳの事を説明している一夏の姿。しかも運悪く、一夏の班には箒も加わっていた

（私もあっちに入りたかったなぁ～）

（こう言う時はエリートなのが悔やまれますわね……）

そして此処に対象こそ違えど、同じ様な事を考える代表候補生がもう一人居た。グループに分かれて授業をする段階で専用機持ちがリーダーを務める事になるのは当然と言えば当然だが、この時ばかりは自分が専用機持ちなのが恨めしい、期せずして鈴とセシリアの考えは完全にシンクロしている。と、そんな事など露知らず、一夏は一通りの説明を終えて

「それじゃあ、実際にＩＳの起動から歩行までやってもらおうか。最初は誰だ？」

「はいはいはーい！　出席番号一番相川清香！　ハンドボール部！　趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ」

「お、おう……てか、何故自己紹介を――」

「よろしくお願いします！」

そして深く礼をして手を差し出してくる。男のＩＳ操縦者と言うこと以外は特に普通の人間なのになんでワザワザ、握手をしたがる

のか？

「ああ、ずるい！」

「私も！」

と、それを皮切りに他の女子生徒たちも一夏に握手を求める

「「「第一印象から決めていました！」」」

そして別の所に目をやれば真琴とシャルの班も同じ様な状態になっている

「え、えっと……」

そして、シャルも自分同様に困惑気味になってどうするべきか判らなくなっている。そんな中――

「とりあえず、だな。そう言うのは後にしてまずは授業を進めないか？　でないと……」

真琴が口を開き、言葉を口にしていたがそれが途中で止まる。そして真琴の視線は目の前の女子達、と言うよりはその背後の存在に向けられており

「遅かったか……」

真琴がそう呟くのと女子生徒達の頭に出席簿の一撃が入るのは同時だった。そんな真琴の班の様子を見た残りの二班の女子は改めて真面目に授業に取り組む事にした。やがて、清香が打金に搭乗、わ

からない部分を一夏に時より質問をしながら起動シークエンスを完了。その後は折り返し込みで３，４０メートルほどゆっくりと歩行を行う

「よし、そこでストップ」

「ふぅ……緊張したぁ～」

そして元の場所に戻ってきた所で彼女は打金から降りて、列の方に戻る

「それじゃ、次は誰だ？」

「私だ」

そう言って前に出てきたのは箒だった。が、彼女は打金の近くまで来た所でそれを見上げる

「しかし、これではコックピットまで届かないな」

量産機には専用機の様に展開と同時に搭乗状態になる様な機能は無い。停止状態から乗り込んで起動させるプロセスを取る。そして清香が打金を立たせたまま止めてしまった為、コックピットまで届かない状態になってしまっている。一夏は何か思いついたのか突然白式を展開すると、そのまま箒を抱える、所謂お姫様抱っこだ。突然の行動に同じ班の女子から「あーっ！」と言う悲鳴が上がる。そしてその中に鈴の声も混ざっていたのは決して気のせいではないだろう。

「い、一夏っ！？」

「ジッとしてろよ。この方が安全だしたな」

気が強いとは言え、箒も女の子。こう言うのに憧れない訳では無い。突然の事に最初は困惑し目を見開いていた箒も、顔は赤いままだが落ち着いてくるにつれてその表情に喜びがにじみ出てくる。尚、この後箒も含め、他の女子の視線に負けて全ての女子がＩＳを立った状態で停止させ、そのつど一夏が生徒を抱えて運ばなければならなくなったのは別の話

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5383s/

ＩＳインフィニット・ストラトス『空を舞うは修羅の拳』

2012年1月15日00時47分発行